

329  
176



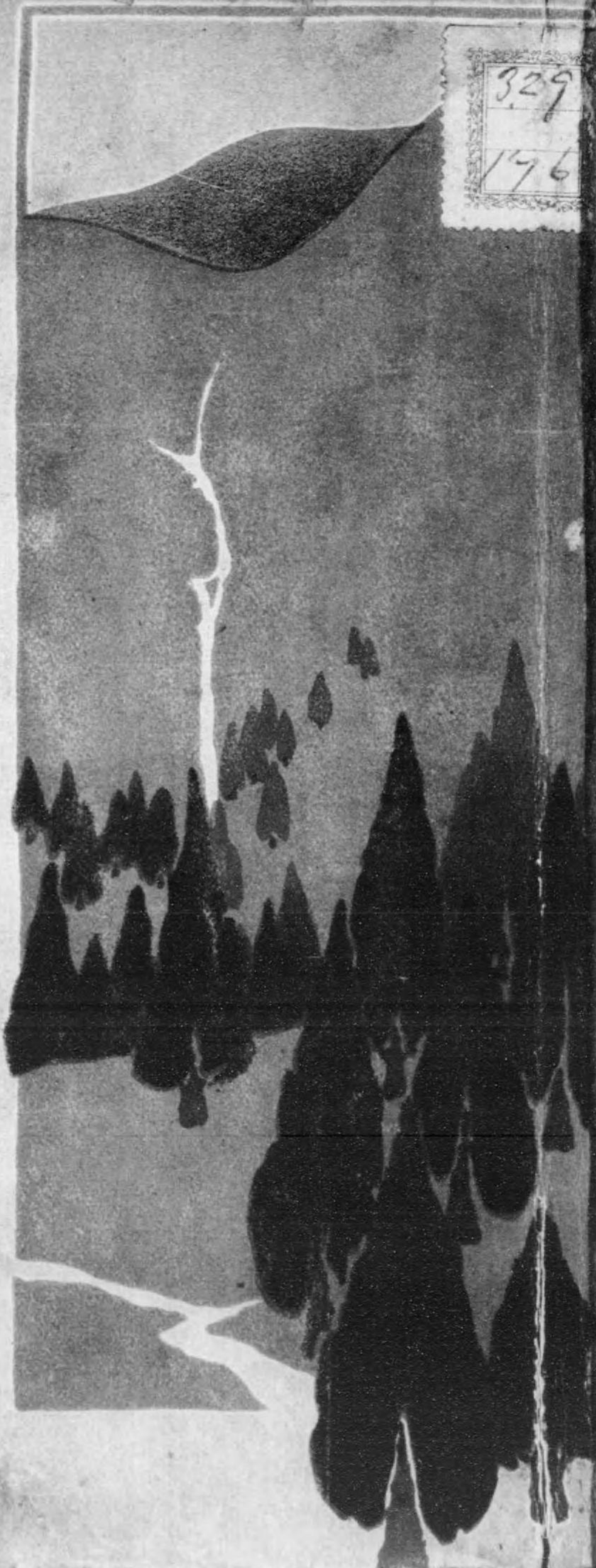
始



6. 2. 4

志  
小  
說  
變  
鄉  
記

堀  
内  
新  
泉  
作



329  
196

小立

說志



愛

郷

記

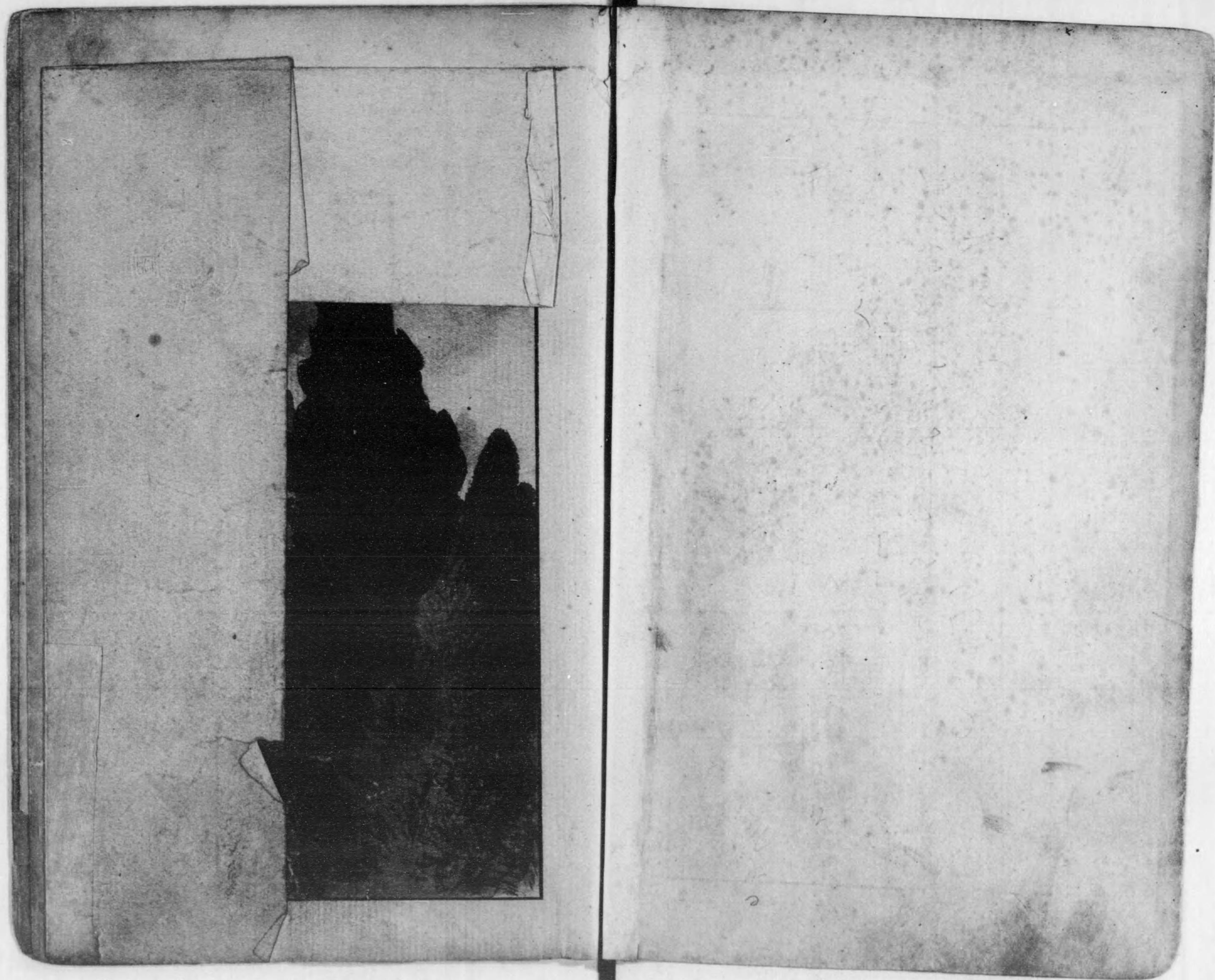
堀内新泉著

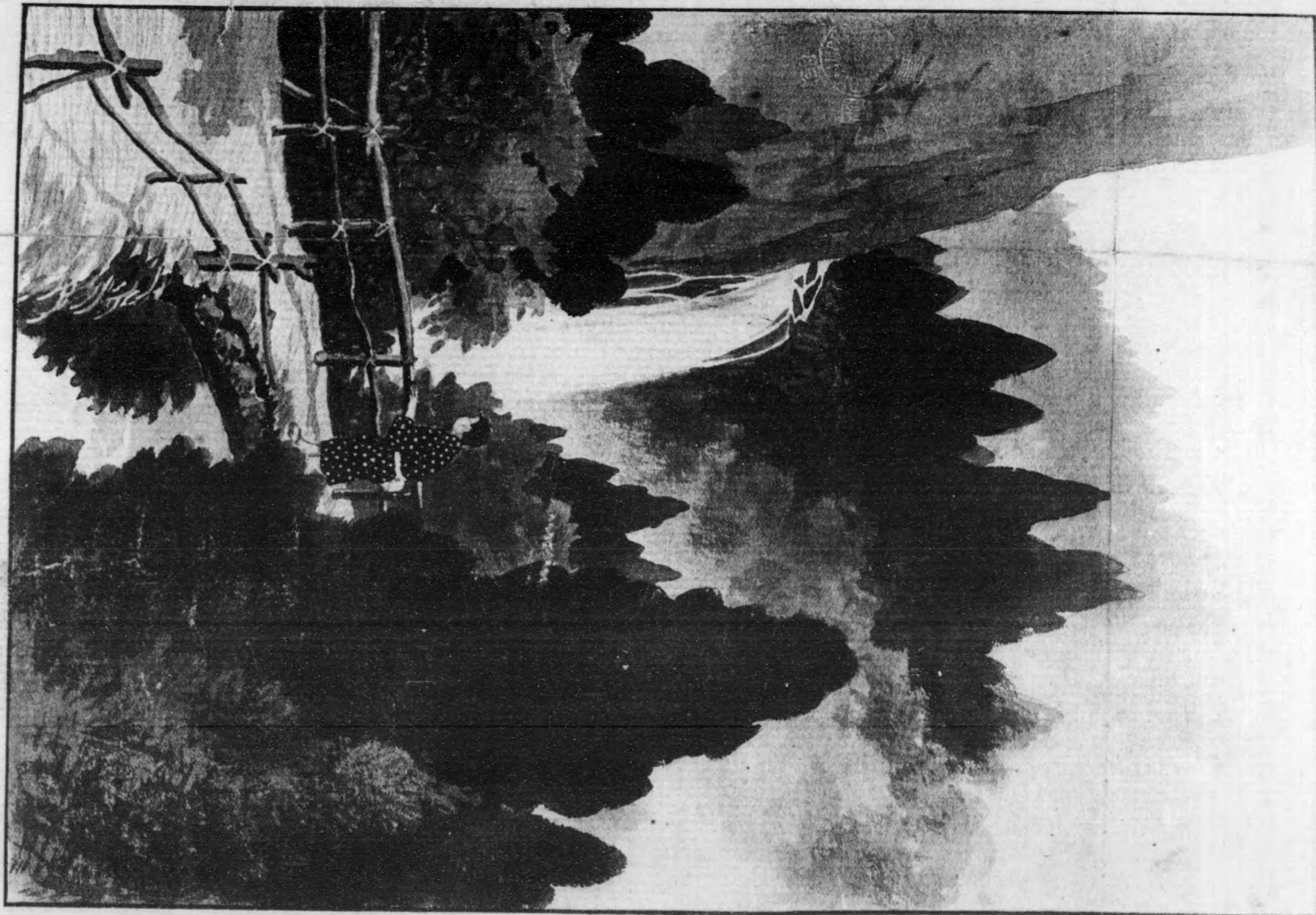


大正

2.7.10

内交





## 序

人は親、土地は郷土に如くは無し。然るに方今青年は、徒らに功名富貴を夢想して、親を棄て郷土に離れ、都市生活に熱狂す。是れ今日地方は衰微し、都市のみ榮ゆる所以也。

これを國家の上より見るも、亦直接その地方の爲より言ふも、斷じて喜ぶべき現象に非ず。今日これを防がずんば、地方は益々萎靡衰頽して、遂には全然その活力を失ふと共に、都市も亦その影響を蒙りて、竟には自滅するに至るべし。

或る時代に於いては、殆ど全世界を支配するに充分なる財力と兵力とを有せし彼の羅馬帝國の一朝にして滅亡せしは何故ぞ。當時羅馬の都府にのみ總ての力集中し、地方の衰微を來しし爲に、社會及び政治は腐敗し、人民は奢侈に流れ、その爲終に破滅の非運に陥りしは、歴史の明かに立證する所也。他山の石、以て玉を攻くべし。おもはざるべけんや。

本書の主人脇谷俊一君は豊後の人也。幼にして父を亡ひ、家道亦大いに衰へ、憂は憂を呼び、禍は禍を招きて、困苦辛酸交々。到る。而も君は頑として屈せず、齡十一歳にして母と二人の幼き妹とに別れ、郷里より三里離れた森町に出て高等小學校に入り、業を終へて後、十五歳にして家に歸り、その村の尋常小學校に代用教員たること二年、この間に於いて専心一意、英語、數學、物理、化學等を獨修し、自

ら其の學問の根底を造る。君は既に少年の頃よりして、眞に努力の人たりしことを知るべき也。

君の郷里は青山流水の勝區にして、最も自然の風景に饒む。村に一大飛泉あり、龍門の瀧と云ふ。直下數十丈、水聲轟然十里に聞ゆ。偶々盛夏の候に際して、君一日この瀧の下に遊び、橋上に立ちて瀑布に面し、水の力の如何に恐るべきものなるかを竊に思ふ。折から二人の紳士あり。おなじく其の橋上に來りて瀧を仰ぎ、水力電氣の効用を説くこと最も精細を極む。君端なくこれを聞きて奮然志を立て、「我れ將來この瀧の水を利用して、家を興し郷土の繁榮を圖らざんば死すまじます」と心に誓ふ。是れ實に君の齡十七歳の時なりきといふ。

この年の秋、西風蕭蕭、白露將に地に滋からんとするの時、君は或る朝早く母と二人の幼き妹とに最も悲惨なる哀別を遂げ、三人に送られて十七年來住み馴れし我が家を立ち出で、村外の野橋に到りて、此處にいよいよ最後の別を告げ、僣憊たる秋水の聲も悲しき橋を渡りて向ふの岸に達すれば、哀れば深き朝霧の中より我が後を慕ひ、一條の山川を隔てて「兄さん」と呼ぶ二人の幼き妹と、次第に霧に其の影の薄れ行く我が子の後を見送りつつ惘然として橋頭に立てる母の姿を振り返り、哀別離苦の涙に咽んで遂に遠く郷土を離れ、神戸に出でて一米人の從僕と爲り、夜間暇を利用して又數學を究め英語を學び、翌年その主人に従つて東京に出で、晝は同じく米人の從僕と爲り、夜間工手學校に通つて電工學科を修む。

て始めて其の志す方に向ふ機會を得、翌年一年半歳にして業を卒へ、また其の米人に從つて彼の地の電氣學校に入り、電氣學を學ぶこと滿三歳、また其の業を卒へて後は、彼の地の水電氣學に入り、初めは工手と爲り、更に見習技師と爲り、實地の練習に従事すること前後四年に及ぶ。

四年の久しきに亘りて電氣學の蘊奥を究め、今や歸朝せんとするに臨み、偶々本國より水力電氣事業發展の爲に渡米せし我が某省の技師、妻木工學博士に端なくも出會し、同博士の知遇を得て共に歸朝し、その事業に依りて、關東地方の最も有力なる水力電氣會社の主任技師となる。而も君の志は身に高給を得て、その生活を飾らんとするにあらず、期する所は其の郷土の繁榮を圖るにあり。されば在職二年にして其の前約を完うし、充分に其の職責を果しし後、直ちに其の位地を他人に譲り、高給を抛ちて郷里に歸り、龍門水電株式會社を起し、母に孝養を盡すの傍ら、銳意その郷土の繁榮を圖れり。

これが爲に山間の一小孤村は、忽ち其の面目を一新して一大都市の觀を呈し、諸種の事業群り起つて、その地方は一般に家富み人榮え、君の素志は貫徹す。その郷黨並びに其の地方民衆の君に對すること、恰も神に對する如きものあるは、是れ決して偶然の結果にあらず、一に全く君が多年の愛郷的至誠と、に結晶して、遂に今日の偉大神聖なる君自らを見出し得たる所以也。嗚呼大丈夫、人間として世に此の上の善美なる成功あらんや。功名何物ぞ、富貴も何物ぞ。君は無冠の帝王也。君は無冠の帝王ならずや。



し何事ぞ  
 徹底と鳴!!!  
 不毛と無徹底だ!!!

余は近時母を亡ひて、日夕風樹の歎に堪ふる能はず。母が白木の位牌に對して精進潔齋、君の傳記を作りし所以は是れ抑も何故ぞ。獨り我が母「貞操院妙心日章大姉」の菩提を吊はんが爲のみならず。今日直下我が國にありては、その何れの地方たるを問はず、時勢は君の如き「郷黨の善人」を多々益す要求しつある事實を明白に認むれば也。豈に他意あらんや。

人に因つて其の語を棄つるは大丈夫兒に非ず。天下の青年讀み來りて本書を讀めし。本書を一讀して百千萬人中唯一人にてよし。若し夫れ本書を一讀せしが爲に、時弊に伴れ従らば功名富貴を夢想し、その親を棄て郷土に離れ、都市生活に熱狂する如き極めて無意義なる、所謂現代青年思想を棄てて眞摯著實なる人生の實生活に入り、永く其の郷土に留りて、我が郷黨の善人を爲り又先達を爲り、一方に於いては我が父母兄弟と日夕親和同棲して、人間最上の歡樂を盡し、極力その家と其の郷土との發展繁榮を圖るが如き人を得ることを得ば、著者の本懐これに過ぐるは無、而して是は又益に余が筆の過分なる一大光榮とも謂ふべき也。

大正二年六月吉日

著者識

四

# 愛郷記

## 目次

(一)	故郷	一
(二)	故郷と吾家	三
(三)	愛郷心	六
(四)	郷黨の善人	一一
(五)	わが故郷	一五
(六)	平家山	一九
(七)	村の風景	二三
(八)	吾家の歴史	二七

(二十) おぼろ月……………七九

(二十一) 春の朝……………八三

(二十二) 飛報……………八七

(二十三) 驚魂……………九〇

(二十四) 妙法……………九三

(二十五) 通夜……………九六

(二十六) 出産……………一〇一

(二十七) 人生の兩端……………一〇六

(二十八) お蝶さん……………一三三

(二十九) 花御堂……………二八

(三十) 馬上の花……………三四

(九) 四季の風光……………三〇

(十) 青葉の世界……………三四

(十一) 夏の山水……………三六

(十二) 山中の秋色……………四一

(十三) 冬の山里……………四四

(十四) 人生の起點……………五〇

(十五) 最初の打撃……………五五

(十六) 有爲轉變……………五九

(十七) よろこび……………六三

(十八) 花の村……………七〇

(十九) 夕がすみ……………七四

(五十二)	凱	旋	二五
(五十一)	獨	學	二六
(五十)	そ の	後	二七
(四十九)	感	謝	二八
(四十八)	若 き 寡	婦	二九
(四十七)	後	姿	三〇
(四十六)	斷	腸	三一
(四十五)	士 官 候 補 生	生	三二
(四十四)	鮎 の 鹽	燒	三三
(四十三)	背 中 の	汗	三四
(四十二)	朝	霧	三五

(三十一)	告	別	二九
(三十二)	初 夏 の 山 路	路	三〇
(三十三)	淋 し い	顔	三一
(三十四)	口 眞	似	三二
(三十五)	嬉 し き	朝	三三
(三十六)	朱 い お	膳	三四
(三十七)	七 七	日	三五
(三十八)	秋	草	三六
(三十九)	松 の	影	三七
(四十)	盆 燈	籠	三八
(四十一)	精 靈	祭	三九

愛郷記目次終

以上

(五十三)	立志の動機	二九
(五十四)	親子	二四
(五十五)	萩の餅	二五
(五十六)	哀別	二五
(五十七)	運の絲口	二三
(五十八)	ボーイ生活	二六
(五十九)	米國行	二三
(六十)	見習技師	二六
(六十一)	嗚呼故郷!	二四
(六十二)	電氣世界	二九

此方書林漢心者は左に感概を記す。一、Y.A.G.

一、一、一、一、一、一、一

諸人の境遇は依つてその本によつて大いに得、又利する人もあらう、又、窮乏らぬ  
活と同じ視する人もあらう  
是等は其の人の境遇の  
然らざるものか、  
俗のいふに依つて其の  
するべきは、  
けなすべし。

（二）故郷



こゝに記す。

凡そ地上の世界に於いて一番住み好い所は我が生れ故郷であらう。世界  
世界の總ての人の中で一番懐かしい人を求めたならば、我が両親  
のはあるまい。

人間が生れ生れ故郷の水を飲んで、我が両親と共に暮し、兄弟  
に相近く住むことが出来たならば、人生これ以上の幸福はないで  
は、自己の心願の向うに大なる幸福がある。我々の生れ故郷に  
の力を抱いてその後の人生を充実させる。

諸君よ、  
大きな理想を書き  
つて、上をせよ。  
我々の生れ故郷に  
の力を抱いてその後の  
人生を充実させる。

家庭不和の爲に  
故郷を捨親を去る

今日世間大多数の青年は、我れから進んで郷土を去り、父母兄弟姉妹に別れて異郷の客となり、自ら好んで到る處慘劇に満ち、阿鼻叫喚の聲に響き腸に泌み渡る都會生活の火柱に抱き着き、今更驚き目を覺し、悶えつ苦しみつする間に胸を焼かれ腹を焼かれ手を焼かれ足を焼かれ、果は取換のない生命までも焼き盡されるやうなことになるのは、實に無慘な話である。

彼等は何うしてそんな危険な考を起し、自ら好んで戀しい生れ故郷を去り、懐かしい親兄弟に遠く別れて、つまり怖るべき罪惡の外何物をも見出さぬ極めて不淨な、極めて不安な、極めて困難な、極めて悲惨な、且極めて不愉快な都會生活を好むのであらう。自分には何うしても其の了簡が分らぬ。馬加何の...  
それも萬己むを得ぬ事情に餘儀なくされて思ひ立つ向きは格別として、左様でない平和な境遇に在る者で自ら好んで我が生れ故郷を去り、親兄弟

に遠く別れて都會生活の火柱に抱き着き、何等の成し得る所もなく、終には我が生命まで焼き盡すなどは、いづれの點より見ても決して稱讚すべき事ではあるまい。

(二) 故郷と吾家

何人にもあれ我が身に取つて最も因縁の深いものを求めたならば、それは恐らく我が生れた家と我が生れた土地であらう。  
世界の土地は狭くない、世界の家は少なくない。その中で我れは何の國、何の土地、また何の家と限られて生れて来たのは、ただ偶然の結果であらうか。その因つて来たる所を靜に回想したならば、これには何か深い因縁、約束、命令があるに違ひないと云ふ考が、恐らく胸に動くであらう。  
兎に角人として吾が家、吾が郷土を戀しく思はぬ者は一人も無い筈である。言ひ換へて見れば世界の中の何んな結構な土地よりも、また何んな結

構な家よりも、我れに取つては我が生れた家と我が生れた土地とが何處よりも一番戀しくなければならぬ筈である。否、一番戀しいものである。假令その郷土は何んな片田舎であらうと、また其の家は何んな茅屋であらうと、その土地又は其の家の如何に依つて、我が家を思ひ郷土を思ふ戀しさに違ひのあらう道理はない。

論より證據、二三年も他郷に客となつて居つて故郷に歸り、假令細谷川の頭に一軒寂しく朽ちかかつて立つて居る茅屋にもせよ、此處が我が故郷、彼が我が家と望んだ時は、人は何んな心持がするであらう。「その土地は何んな山の奥であらうと、世界の如何なる大都府よりも懐かしく、その家は何んな茅屋であらうとも、恐らく金銀珠玉を以て飾られた宮殿のやうな思ひがして、一刻も早く我が家の敷居を跨いで見たく思ふに違ひない。

我が郷土、我が家は斯くも戀しいものであると共に、また我れに取つては世界中の何處よりも大切なものでなければならぬ。

人として我が家を愛し我が郷土を愛し、愛すると共に極力その繁榮を圖ることは、人間の最も大切な義務である。また人の至情である。

苟くも人として此の觀念がなく、「こんな田舎で生涯暮すのはつまらん」又「こんな茅屋に住んで居るのはいやだ」など云ふ考を起して、理由なく我が家を去り、我が郷土を離れるやうな愛郷心の乏しい者は、假令世界中を廻り盡して見た所で、何處へ行つても、斷じて樂土は見出し得ぬに違ひない。

これに反して愛郷心に富み、我が家と我が郷土の大切なことを忘れず、始終その家と郷土とを愛護する心懸を有つて居るやうな者であれば、假令餘儀なく我が家を去り我が郷土を離れて異郷の客となるやうなことがあつても、その人の前途は必ず幸福なるものである。

人間として我が生れた家を忘れ、我が生れた土地を忘れるやうな者であれば、それと同時に我が祖先を忘れ我が郷黨を忘れ、終には己れの身をも亦忘れる者である。斯くの如き人間には神も無ければ佛もなく、國家も無

ければ君主もない。  
 彼は即ち獸である。否、禽獸と雖も、その多くは我が家を受し我が郷土を護つて居る。彼は即ち禽獸にすら猶劣つて居る。斯くの如き輩にして人間として能く大成することが出来やうならば、人の道たるや誠に容易なものであるが、世の實際は中中以て、そんな浮浮した考で、此方の注文通りに圓く行くべきものではない。

(三) 愛 郷 心

今日時勢の要求に應じて起たんと欲する滿天下の青年は、先づ其の本に復つて我が家を愛し我が郷土を愛することが大切である。  
 我れ眞實この觀念に富んで居れば、假令その郷土はいかに邊鄙な片田舎であらうとも、また其の家はいかに貧しからうとも、強ひて我が家を去り郷土に離れ、父母兄弟郷黨に遠く別れて異郷の客となり、進んで危地に身を

吾作村あり

十のりん

有る人

十

十

を投ずる必要はない。若るものありて  
 自然は何れの地方に對しても必ず何物をか興へて居る。その總てを盡して居る土地であれば、人類は昔から其の土地には住んで居られない筈である。既に村あつて其處に昔から幾干の人が住んで居るとすれば、その土地には昔から何か必ず生産があるに極つて居る。  
 今日では人口が殖えて来て、從來の生産に依つては生活すべき道がないと云ふやうならば、更に産業を起すが宜しい。  
 「資本が無い」と云ふ語は、懶惰漢の字書以外には斷じて見當らぬ語である。馬の蹄やへ

資本が無ければ智慧を出すが宜しい。  
 今日人類の活路はただ「発見」に依つてのみ見出される。  
 假令いかに資本があらうと、今後は何か新しい発見が無ければ、到底面白い事業は出来ぬ。

吾川吾川々に非ず、現在り社會はマアネー  
 依る支配は水は長も、知は野急はりりや金無くは



學問も發見、戦争も發見、實業も發見、今日以後は總て皆「發見の力」を要せぬものはない。

學者が講義をするにしても、古人の發見した所を、ただ蓄音器的に述べた丈では、世の人が徹鼻いと云つて鼻を撮む。世の人を心服させやうと云ふには、確たる自己の新學說、即ち學問の上に何か新しく發見し得た所が無くてはならぬ。

戦争も今後は武器の發見に依つて敵と味方の強弱が定まり、實業も今後は一に發見の力に依つて其の大を致すのである。

醫者も今後尙多くの發見を要し、宗教家も教育家も漁夫も農夫も、その他人間總ての階級を通じ、皆一として發見を要しないものはない。

世に未だ發見の必要がある以上は、滿天下の青年に各自何か活動すべき餘地のないと云ふ理窟はない。

信州の淺間山は東京に一番近い噴火山である。淺間山の頂上から晝夜の

不能んく、  
別なく噴出して居る火力を積つて見たならば、何馬力あるであらうか、實

に太したものであらう。

若し其の火力を東京に導いて来て、諸方の工場の動力に充てるも宜し、又はこれを動力にして、何か新事業を始め、その儘空しく朽ちるであらうか。否、

彼は世の資本家に必ず歓迎せられるに違ひない。

これは獨り淺間山のみには限らぬ、また東京ばかりにも限つて居らぬ。

されば我が地方青年は、徒らに其の郷土を去らず、各自その郷土郷土に留まつて、何か生産上の新發見に努力することが大切である。

山あらば其の山を利用せよ、水あらば其の水を利用せよ。その他石も好

し土も好し、木も好し亦竹も好し、僅か一本の竹と雖も其の使用方の如何によつては幾通りにも變化する、箸にもなれば籠にもなり、從來の發見に

依るも、竹の利用法は幾十種の多きに上つて居る。

コンナ多量の噴火の場  
ヲ雖も其の噴火の  
が、雨に打たれ又その  
を、  
多量の噴火の場

心掛云々ウウナウ  
ンモエフトトリカヤ  
ハナイエナカ

今後更に竹に就いて思ひを凝したならば、何んな有益な新発見がないと  
も限らぬ。或は竹の或物から全世界の肺病患者を救ひ得る薬液が得られな  
いと、誰にも断言することは出来まい。

獨り竹のみならんや、獨り薬品のみならんやである。その智と力との使  
用法如何に依つては、總ての物に就いて如何なる発見がないとも限らぬ。  
ここに心を留めて、工夫、努力の功を積むことを敢てせず、徒らに我が  
家を去り我が郷土を離れ、我が父母兄弟郷黨に別れて、不安にして苦痛多  
き都會生活を運ぶのは、實に過つた考である。

斯くの如き考を起さず、萬己むを得ぬ事情でも無い限りは、成るべく我  
が郷土に留つて生産的發見に努め、渾身熱誠なる愛郷者となつて、我が家  
を起すと共に我が郷土の繁榮を圖る如き青年は、是れ真に我が國現代の要  
求に應ずるに足る資質を具へたものである。

(四) 郷黨の善人

今日多數の地方青年は茲に心を留めずして、何故都市にのみ集中するで  
あらうか。

今日の如く動もすれば鋤鋤を棄てて多數の地方青年が華美な都會生活に  
憧れ、確たる目的もなく自分の生れ故郷を去つて都會にのみ集まるのは、  
これを國家の上から見ても、亦直接その地方の爲から見ても、實に憂ふべ  
き現象である。

確たる目的も有せずして都會に集まり、彼等の一樣に望む所は等しく是  
れ功名富貴である。併しながら功名富貴は何人にも容易に得られるもので  
はない、都會の地にさへ出れば、功名富貴が路傍に轉がつて居るものだと思  
ふと、それは飛んだ心得違ひである。そんな迂濶な考を懐き、強ひて危  
険を冒して都會の地に出なくとも、我れ真に努力する所には、何處に居つ

ても功名あり富貴あり、更にそれ以上の榮達あり幸福あり、いかやうにも立派な生活を營むことが出来るものである。

これを思はず、學問をするにも田舎の學校では出来ぬ、實業に従事するにも都會の地でなければならぬ。ましてや高位高官の人になつて、身の榮達を遂げやうと云ふには、是非とも東京に出なければならぬ。青年の思想が總て皆斯う云ふやうに虚榮心の捕虜になつて、我れもくと都會に出て來るやうになつては、地方の村落は勢ひ衰頹せざるを得ぬ。これ我が國家の爲に喜ばしい現象であらうか、また直接その地方の爲に喜ばしい現象であらうか。

功名富貴を恣にし、また高位高官の人になれば、それで人間は人間として最も大成したものと云へば左様ではあるまい。また天下の青年が悉く富豪になり高位高官の人ばかりになつた日には、この世の中は何うなるであらう。第一皆が皆左様なれる譯の者ではないが、皆一様に左様なつたら、

彼等は徒らに金を抱き榮達を抱いて餓死しなければならぬであらう。

世には大臣や大將は幾人も要らぬ。その最も必要を感ずる者は、日日眞面目に働く所の人である。また社會の爲には斯う云ふ人が一番大切なのである。

支那の曾國藩は其の子弟に對して、「余は卿等が高位高官の人となつて、敢て權勢を張る事は望まぬ、寧ろ郷黨の善人となる事を望む」と言つた。

これは直ちに今日我が國の地方青年に對する實に最も適切なる訓戒であるまいか。今日直下我が國に於いては、その何れの地方に於いても、「郷黨の善人」を求むる聲は到る處に聞えて居る。

然るに今日の如き有様で地方有爲の青年が續續四方から都會に集り、一國の政治、經濟、智識の總てが都市にのみ集中したならば、勢ひ衰微を來すことは免れまい。

これには實に戰慄すべき例がある。或る時代に於いては殆ど全世界

配するに足りる財力と兵力とを併せ有して居つた彼の羅馬帝國が、一朝にして榮華の夢の覺めるが如く滅亡した原因は何であるか。

彼の羅馬の大都府に總ての力が集中した結果、地方が漸次衰頽したので、忽ちにして社會及び政治の腐敗となり、人民は一般に奢侈に流れて、遂に破滅の非運に陥つた事實は、歴史の明らかに語る所である。

現代に於ける或る學者の説に、「一國の政治、經濟、智識等總ての力が都市にのみ集中すると云ふ事は、これ實に由由しい大事である。これを人體に譬へて見れば、例へば腦充血のやうに其の頭部にのみ血液が集つて、四肢は冷却すると云ふ譯である。これ決して人體をして健全ならしめる所以でない。苟くも全身に血液が循環し、健全なる状態を保たしめると云ふ事に就いては、頭の頂上から足の爪先まで血液が循環して居なければならぬやうに、政治、經濟の状態に於いても、總ての財産、總ての智識が都市にも町村にも循環して居なければ、その國家は決して完全な發育を遂げるこ

とは出来ぬ」と聞いた事があるが、これは實に左もありさうな事である。

されば苟くも我が身を愛し或が家を愛し、我が郷土を愛し、同時に我が國を愛する地方青年は、餘儀なき事情のある外は、青年客氣の癡癡的虛榮心に驅られて、迂闊に其の郷土を離れるやうな事をせず、彼の曾國藩の訓戒の如く、前途有爲の青年程、その地方地方に踏み止つて、「郷黨の善人」たる事を期して貰ひたいものである。

(五) わが故郷

斯くは云ふものの、何を隠さう、我れ脇谷俊一は年少にして我が生れた家を去り郷土に離れ、母や二人の妹や郷黨に遠く別れて、都會に走つた一人であつた。

併しながら自分は好んで此の冒險を取つた譯では断じてなかつた。萬己むを得ぬ運命に餘儀なくせられて、哀別の涙を呑んで、遠く郷土を去つ

たのであつた。  
 親と郷土の難有味は、一度遠く離れて見なければ分らない。假令懐に金が十分あるにしても、始めて親の膝下を離れ、始めて郷土を去る時は、誰にも一種言ひ知らぬ哀情を惹起させるに相違ない。多年見馴れた故郷の山は懐かしい、多年聞き馴れた故郷の水の聲は戀しいものである。まして我れを生み我れを育てた親が戀しくあるまいか。  
 これは親に別れて郷土を去る時、何人の胸にも當然起るべき情であらうが、況んや餘儀なき事情の爲に親に別れ、我が郷土を遠く去るに望んで、懐は淋しい、行先に便はないと云ふ者にと云ふ者に取つては、その哀情は又一しほで無ければならぬ。

自分はこの堪へがたい哀情を嘗て親しく味はつた一人である。當時自分は我が親、我が家、我が郷土に對する哀別の悲哀に堪へかねて「ア、人間の最大幸福は、生涯我が生れた土地を離れずに、我が親兄弟並びに我が郷

こんな困難な考案の  
 持った人間のまむ内  
 満ちたら國威の底を  
 底の底までつぶすか

黨と親しく暮し得ることで、人間の最大不幸は、我が生れた土地を遠く離れて、我が親兄弟並びに郷黨に背いて過すことである」と熱熟思つた。  
 その後自分は不幸流離の便ない境遇に十有餘年の歲月を過したが、その間自分は一日も家を想ひ親を想ひ兄弟を想ひ、また我が郷土と郷黨とを想ひ起さぬ日とは無かつた。  
 斯くまでに戀ひ慕つた自分の故郷は何んな土地であるかと言へば都會に遠い片田舎、何の縁故もない人には、物の三日と其の土地に留まることは苦痛であらうが、故郷となれば妙なもので、自分に取つては地上の世界の何處よりも懐かしい。また實際自分に取つては此の土地より世界に住み好い土地はない。  
 我が郷土は我れを生み、我れをして奮起せしめた、我れに取つては最も縁故の深い土地である。

「何うかして吾が家を興し、吾が郷土をして繁昌せしめたいものだ」と

29  
 29  
 !!

云ふのは、我が年来の希望であつた。敢て誇る譯ではないが、これは人間として誰彼の別なく、是非とも起さねばならぬ考で、イヤ人間として誰にも起らなければならぬ考で、その考を起すのは、大いに大切な事であらうと思ふ。

自分は飽くまでも吾が家を誇り我が郷土を誇り、更に進んでは我が國家を以て廣く世界に誇りたい。

先づ其の第一歩として、自分は吾が家と我が郷土とを稱讃したい。何となれば我れに取つては吾が家と我が郷土程大切な所はない。吾が家と我が郷土とは、世界の何處よりも好い所であると言ひたい。また我れに取つては事實全く左様である。

然らば我が生れ故郷は何んな土地であるか。自分は其處に何うして育つたか。また何うして一時故郷を去らねばならぬやうな運命に陥つたか。吾が家並びに我が郷土の今日を語らうと云ふには、その前提として、先づ此

等の事から述べねばならぬ。

(六) 平 家 山

自分の生れた所は、豊後國玖珠郡東飯田村字松木と云ふ都會に遠い山間の一孤村で、同郡森町を東南に距ること約三里の位置に在る。

わが村は恵良、右田、松木の三部落から成つて居る。元來わが豊後國は北部地方を除く外は酷い山國であるが、中にも我が郡は四面山又山に圍まれた所で、郡中多くは山岳重疊、特に東南の境になると、千山萬岳群り起つて峻峭を極め、深山幽谷人跡未だ至らざる地也。

わが松木附近の有名なる山岳を挙げれば、北に大祖山あり、これに續いて東に平家山あり、東に字土山あり、これに續いて東南に岳あり、西南には青野岳近く聳え、西北には小巖扇山、巖扇山、

波山等峰を連ね巍巍として皆雲表に聳えて居る。我が郡の主要なる産物は米、麥、これに次いで林産最も多く、椎茸の産も亦少なくない。今日でも到る處に鬱然たる森林を見るが、昔は我が郡全体に亘つて大森林を成し、北の方豊前境以南には、人烟全く上らずと云ふ状態であつたさうである。

わが松木から二三里東北の方に平家山と云ふ有名な深山がある。これは今日でも晝尙昏き森林を成して居るが、昔は更に木深い山で、壽永の昔、壇の浦の海戦に破れた平家の殘黨が、道を豊前に取つて此の山に逃げ籠り、柚人、獵人となつて世を送り、中には平家一門の公達上講方も少からず此處に世を避け、その生涯を終つたと云ふことである。

昔は平家山の麓の森林中に此等の人人が一部落を成して、他の里人とは断じて縁組をしなかつたと云ふことであるが、土地に存する記録に據れば、文化、文政の頃あたりから里近く家を構へて農業に従事し、里人と交際も

する、また土地の良家とは互に縁組などもするやうになつたさうである。

それが漸漸時の推移と共に進んで来て、今日では勿論普通の農民と爲り、郡内諸方の村にも其の後裔と稱する者が少からず住んで居るが、その或る家には今日猶黄金の采配を有し、また或る家には黄金造の太刀や嚴物造の太刀などを有し、中には現に黄金の鍔形を打つた兜や緋威の鎧や、又は金覆輪の鞍などを我が先祖の大切なる遺物として存して居る者が少くない。これ等は價値なき物と見ても、平家の殘黨が此の土地に世を避けて、一の部落を成して住んで居つたと云ふ事に就いては争はれない實蹟が今日明らか存して居る。それは土地の言語風俗等である。

言語の上で言つて見れば、「たまふ」が「たも」になり、「何うしてたも、斯うしてたも」と言ふ。また「たてまつる」が「たてる」になつて、人に物を遣ふことを、目上の人に對しては「上げたてる」若くは「上げ申す」と必ず言ふ。また「のたまふ」が「のたふ」になつて、「誰が何う言つた」と云ふことを、「誰

が何うのたうた」と言ふ。以上は其の一例に過ぎぬが、中には随分古い言語が遺つて居る。これ等の言語は昔は平家の殘黨にのみ限つて用ひられたのであらうが、今日では一般に土地の土語になつて居る。  
昔は髮の結方までも、平家山を中心として我が地方は、他の地方とは異つて居たさうであるが、今日では最早そんな事はない。併し今日でも我が郡内の地方に限つて、男女共に皆腰板の附いた裁着を穿いて居る。土地ではこれを「タツケ」と云ふ。これ等も始めは平家の殘黨に限つて用ひられたのが、後には漸く土地一般の風俗になつて來たものだと見える。  
特に奇異な感じのするのは、土地の故老の口に、今様や朗詠の轉訛したやうな一種の俗歌が残つて居る。更に不思議なのは、平家の氏神とも見るべき熊野權現や嚴島辨財天が諸方に勧請せられて、今日でも土地一般に篤く信仰せられて居ることである。

(七) 村の風景

今日では我が郡は一町七ヶ村に分たれて居るが、郡全体の地形は四面高山に圍まれて、有名な玖珠川を始め、無数の川や谷が縦横に流れ、四面高山に圍まれた中に、また幾多の山や丘陵が起伏して、その間に田野あり人家あり、米は玖珠米と稱つて、昔から名高い米が二萬石以上も取れる。麥、大豆、その他の産出額も少くないが、林産に至つては實に豊富なものである。  
この句は何だ？ 道府、や、大、や、わ  
郡の首府は森町で、昔は此處に知行高一萬五千石の國司大名來島伊豫守様が居られた。  
わが松木は戸數四十戸ばかりの部落で、後に青野岳を負ひ、前は龍門川の清溪に臨んで居る。  
四面高山に圍まれて居るので、眼界の豁然たる眺望はないが、龍門川



對岸には仙人岩と稱つて、その形千變萬化窮りなき斷崖絶壁が流に沿うて北に走り、岩には千年の老松が翠の袖を空に擲げて流に臨んで倒に懸り、外に色色の常緑木や落葉木や、藤、躑躅又は巻拍、風蘭、石斛などが自然に岩を飾つて居る。

青野岳と龍門川の間には山あり丘陵あり田園あり人家ありて、四時共に總ての自然を豊に宿し、到る處に山を仰ぎ、また向ふ處に谷川の流の聲を聞き、村は自在に四圍山水の中に在つて塵寰を絶し、宛然一幅の好活畫をなして居る。

村外には有名な龍門の瀧と稱ふ一大瀑布がある。水源を青野岳に發し、わが松木の村上で直下數十丈の瀑布をなし、水聲轟然、十里の外に聞えて居る。わが松木の北端を走つて仙人岩の根方を洗ひ、急湍奔流をなして北に下る龍門川は、即ち此の瀧の下流である。

この川は十里北に下つて豊前に入り、驛館川と改まつて豊前米の大部分

に乳となり、末は周防灘に注いで海に入ることは地圖の示す通りである。

この川の源をなして居る龍門の瀧は、龍門岩と稱する實に峻しい岩と岩との間から屈曲して下り來り、直ちに急轉直下して高さ數十丈の瀑布をなして瀧壺の深い潭に落つるのであるが、我が松木からこれを望めば、宛然一頭の銀龍が、今や體を拈つて天に上らんとして居るやうに見える。

瀧は其の幅に於いても狭くない、否、瀧としては極めて幅の廣い方であるので、晴天の日は數里若くは五六里、或は十里近くも隔たつた平家山、太祖山、小巖扇山、巖扇山、又は黒岳などに登れば、所に依つては瀧の全身が明らかに見えるさうである。

わが村の有名なる所有物は、ただ龍門の瀧や其の他の畫的風景ばかりでない。村に昔から諸病に能く効く有名な硫黄泉がある。春秋の二季には諸方から大勢湯治に遣つて來る。

併し不便極まる山間のことであるので、勿論完全な宿屋などはない。村

から二三丁隔たつた所に浴場があつて、其處に二棟ばかり大きな家がある。家は何方も廣いには廣いが、内は一室一室に仕切つてはない。浴客は各自家から糧食を持つて来て、その中に思ひの席を取り、三日、五日、若くは七日位湯治をして歸つて行く。

由來豊後には有名な別府温泉を始め、諸方に澤山温泉があるが、わが玖珠郡にも獨り我が村ばかりでなく、諸方に能く効く硫黄泉が多い。

何故かと云ふと、阿蘇火山脈は西南境より東北に向つて我が縣下を横断し、九重山、由布嶽等の火山を起して居るので、その附近の地には温泉多く、硫黄の産も亦極めて多いのである。

土地の故老の言ひ傳へる所に據れば、わが松木温泉の如きは、寛永年間（一六八四—一七〇四）に於いて、一夜の間に或る人家の庭前に突として噴出したと云ふことである。

村人の健康状態は一般に極めて好良である。村人はこれを以て一に温泉

の効能に依るものとのみ確信して居るが、何しろ土地が非常な健康地である。空氣と日光とに十分富み、飲用水の如きも實に申分のない土地である。自分は郷里を去つた後、随分諸國を歩いて見たが、わが松木の如き住み好い土地は、何處へ行つても無いと思つた。

(八) 吾家の歴史

この村に土地で名高い脇谷と云ふ舊家がある。それは即ち我れ脇谷俊一が初めて此の世の光を拜んだ家である。

系圖の語る所に據れば、元龜（一五〇一—一五〇二）天正（一五七三—一五八二）の頃に當つて、豊前の深井と云ふ所に、脇谷美濃守俊高と云ふ一人の武將あり、深井の城に據つて、四隣に武威を輝かして居つた。

或る事から同國の高井氏と確執に及び、合戦數回の後、一夜敵に夜襲かけられ、武運拙なく遂に高井氏の爲に滅されて、美濃守は城に火を

割腹して世を果てた。  
 その臣月山某と云ふ者、落城の砌舊主の遺子梅若丸、並びに其の後室を奉じて、二三の同志及び侍女と闇に紛れて間道より落ち、少からぬ輕寶珠玉を携へて此の地に來り、龍門川の頭に絶勝の地を相し、居を定めて世を忍び、終に此の土地に土着して、子孫相續ぎ十八代を経て、我が父俊介の代に及んだとのことである。  
 明治維新前わが祖父俊右衛門の代までは、代代松木村の村長を勤めて、田畑山林その他少からぬ資産を有し、一方には農を業とし、土地の名望家として世に榮えて居たさうである。  
 されば今日猶存して居る家屋の如きも、世間普通の農家造とは異つて居る。これは嘉永一二年あたりには我が曾祖父俊兵衛が少からぬ金を投じて改築したものだと云ふが、その後六十五年來風雨を浴びて來ても、未だに確りして立つて居る。

何しろ間敷の多い廣い家で、座敷も幾間かあれば、外に佛間や茶室などもある。表玄関は式臺附で、座敷には皆各自に床間、違棚などが附いて居る。門も整然と長屋門に出來て、土蔵も二棟立つて居る。  
 家は丁度寺でもありさうな高臺に立つて居る。表の村道から南に曲つて十間許坂を登ると、其處に長屋門がある。門を潜ると平地があつて、左右に樟の大木が三本宛森然として森をなし、その間から石階を二三間登ると、廣い表庭があつて、正面は玄関になつて居る。  
 家の後には旭山と云ふ半圓形の山があつて、雜木が森森と茂り合ひ、眼下は直ちに龍門川の急流で、近く對岸の仙人岩と相對して居る。  
 最早これ丈で風景は十分であるのに、奥座敷の障子を開ければ、西南の方の方つて高い所に龍門の瀧の殆ど全身が仰がれる。  
 近く此方に眼を引けば、田園、森、小山、又は竹藪の蔭或は細谷川の頭なごに、二戸又三戸、或は一戸若くは五戸と云ふやうに、草葺屋根の農家

が點點として山色水聲の村を疎に綴つて居る。村の中部は旭山の南に隠れて、その下は又東北の方に見はれ、おなじく田園、森、小山、又は竹藪の蔭、或は細谷川の頭などに、その多くは草葺屋根の農家が疎に見えて居る。山又山の間であるので、自然水の流が多い。その水を利用して、家あれば必ず水車が懸つて居る。されば春夏秋冬の別なく、わが村に於いて絶えず聞えるものは、水と水車の音である。

(九) 四季の風光

自分は何うしても我が村の四季の風光を忘れることが出来ぬ。春は二月の下旬になると、此處の竹籬、彼處の茅屋、又は藪の中、或は野水の畔などに梅が咲いて、到る處に清香馥郁、何方に向いても白い花が早春の日光に燦燦と輝いて、星の世界に生れたやうな心地がする。

梅の生命は稍長く、それが大概散つたと思ふと、はや三月の下旬には桃が咲く、李が咲く、梨が咲く、柳が芽を吹く、櫻が咲く。この季節になると、里野山の區別なく、總ての紅白一齊に蕾を破つて色香を争ふ。花より明くる此頃の曙の景色を都の人に見せたい。春禽鳴いて春日長閑に、蝶飛んで東風和かなる野を見れば、菜の花に續く青い麥畑に質樸敦厚なる村人の鍬が暖い春の日の光を受けて閃閃と銀のやうに輝いて居る。試みに野橋の頭に立てば、寛寛として下る春水の汀には芽が萌え、糸のやうな柳の影や紅白の花の色が鏡のやうな水の面に鮮に映つて居る。近きは青野岳、曾部岳、宇土山、それに續く平家山、北の方つて大祖山、西南の方に見える小巖扇山、巖扇山、黒岳等四山悉く霞に眠り、山色淡として夢の如く、龍門の瀧の音まで何となく長閑に聞えて、彼の女も霞の奥に丁度障子でも立てたやうに微白く見える。空には雲雀が春の光を彼此に謳歌して、遣り切れぬ喜びを天上に向つて

高く、次第に高く運んで居る。春の夕の光景は、更に又平和である。年の如き長閑な日が霞みながら夜に入ると、晝間の暖さ長閑さが村の隅隅まで猶漂うて暑からず寒からず、實に地上の樂土の思ひがある。

村人の姿が野に全く見えなくなつて、一面に夕霞が立渡つたと見ると、この頃は丁度曾部岳の左の脇腹の邊から飽かしい朦朧月が顔を出す。さうして漸次高く登つて一村の花や柳に和かい光を送ると、谷川傳ひ手製の横笛など吹いて遊びに出かける若者もある。

やがて緑く萌え出でんとする草木はこれを己れの乳だと喜ぶであらうが、今が盛りの花には悲しい春雨の村は誠に静である。春雨の蕭蕭と降り注ぐ日は、柳が烟つて燕の翼も何となく重さうに見える。斯う云ふ日は村人も一日雨に眠つて疲れを休めると見えて、何處の家を覗いて見ても、實に静なことである。村に一軒酒の受賣をする家があるが、春雨霏霏として糸の

如く、紅白の枝が水晶のやうな幾千萬の露の玉を綴る日の夕方になると、彼此の草葺屋根の家から村の女が古い番傘を差して、荒繩の緒を附けた貧乏徳利を下げて、おなじ時刻に酒屋の門に集まつて来る。

花ちる里の風情は一しは、殊に入相の鐘の音の聞える頃などは、よろづの風物何となく身に泌みて哀れが深い。

行く春の花の生命は、我等人間の運命のやうに脆い。それで無くとも散り易いのに、年によれば何うかすると、この頃生憎雨の多いことがある。

わが村には櫻が多いが、名残少く散つた頃、雨の日などに出て見ると、地上に無数の紅萼が溢れて居る。番傘片手に暫く足駄を止めて居ると、毀れた竹の籬の間から雨に尾を垂れた鶏が出て来て、それを啼くことなどもある。さうして何處かにしくと葉を打つ音、若くは牛の鳴く聲などが聞える。晩春殊に雨の日の我が村は、實に閑寂なことである。

(十) 青葉の世界

美しい夢の跡なく覺めたやうに、花が残らず散つて了つて、僅に止まる山吹の八重の盛を春が暮れると、次の時代は野も山も里も青葉の支配に歸して、緑蔭幽草の世界になり、村の景色がまるで一變して了ふ。

里近い山は勿論、この頃の四圍の遠山は何時の間にか染めたやうに碧く見える。これと同時に一方に於いては、四季の花の中で、その色最も濃艶なるものが一齊に咲き始める。躑躅、霧島、藤、牡丹、芍薬、菖蒲、燕子花などは申すに及ばず、この外種種色の強い花が咲く。

この季節になつて、里近い山に行つて見ると、若葉の下に其處にも此處にも火が燃えて居る。イヤ火ではない、それは躑躅の花である。また松に藤の花が下つて居る。

就中見事なのは、この季節に於ける我が村、イヤ吾が家の所有物と見て

も宜い仙人岩の景色である。峻しい岩に若葉が茂り、躑躅や蘭や藤などを始め、名も色色の花が五色に咲いた眺めは、鬼が奇麗に刺繍した襦袢でも着て立つたやうである。

五月に入れば麥既に伸び盡し、野は一面に青氈を布き詰めたやうである。この月の朔日あたりから青葉の村に此處彼處轍や吹流が立つてハタ／＼と風に鳴り、端午の節句には一般に茅巻を作る。

この季節に入ると、わが松木村は俄に賑かになる。麥の熟するまでに身體の保養をして置かうと云ふので、近郷の者は云ふに及ばず、豊前邊から續續湯治に遣つて来る。

これ等の湯治客が引きあげる頃は、麥既に熟して村は一般に多忙しくなる。夜は時鳥、蛙の聲が盛んに聞え、水邊には到る處螢のイルミネーションが點れる。これが又實に見物である。

麥は刈られて苗代緑く、野は見る見る鋤きかへされて水田となる。村は

既に農事の戦闘準備全くなり、有らゆる農具を把つた一村の男女が残らず野に出て戦線に就く。

折しも五月雨の季節に入る。卯の花木かげに雪を晒し、毎日ザブ／＼五月雨を浴びて居る。村の男女は簑笠に身を鎧ひ、雨中に幾隊戦線を布いて、歌ひながら手を揃へて田を植ゑる。この頃の家は大方空になつて、頻頻戸口から出入するのは、毎年来馴れた燕ばかりである。さうして何の家の前を見ても規則のやうに、必ず紅い葵の花が二三輪咲いて居る。

(十二) 夏の山水

村は程なく盛夏の支配に歸して来る。

夏の我が村は青山流水、清風山月、川魚蟬聲の世界である。

既に中元も過ぎると云ふと、滅切暑さが募つては来るが、四面山又山に圍まれて居るので、日中の外は暑さも大きに樂である。云ふまでもなく我

が村は自然の水郷で、諸方の山から流れ出る清冽な水が村を縦横に流れて龍門川に注いで居る。

家あれば水あり、水あれば心す小さい水車が戸戸に一ツ宛ある。喝すれば其の水を汲んで飲み、熱すれば其の流に投じて浴びる。殊に小供に取つては夏の生活が四季の中で一番愉快である。

夏は龍門川から鮎や鯉や鮒や鰻が毎日豊に上るので、人は殆ど川魚の匂ひに飽きる位である。獨り龍門川ばかりでなく、何れの谷川に糸を垂れても、鮠、山女、鰻などが容易に釣れる。

朝早く起きて戸を開けると、四山濃霧の奥に眠つて、眼下の龍門川も霧に深く被はれて居る。家棟越に旭山を仰いでも、あなじく霧に閉ざれて、鬱然たる夏木立が茫然と黒く見える。少し隔てた山や川が見えぬ筈、自家自身すらも霧に包まれ、軒に濃く霧が懸つて、真に咫尺を辨せぬやうなことが珍らしくない。

霧の深い朝は日中必ず晴天と極つて居る。「ア、今日も亦天氣ぢやなし」と、霧を見て我が郷黨は皆喜ぶ。

後の山に蟬が一聲じいと鳴いたを合圖にして、盆のやうな朝日が漸々昇るにつれて、霧は次第に薄らいで行く。見て居ると、先づ近い所の木が見られる。家は見られる、青田が見える森が見える、果は龍門の瀧も霧の中から幾分姿を見はして来る。

斯うなつて来ると霧は忽地消えて了ふ。對岸の仙人岩が強い旭の光を受けた頃は、四方の高山何れを見ても腰から下は霧の寝衣を脱いで青い肌色を見はして居る。それから漸々薄くなつて、山は全身を見はして来るが、何うかすると霧が色色の形に消え残つて、或る物は今や山越せんとする龍の如く、また或る物は輕氣球の如くフワ／＼して、山の峽間などに迷つて居るものもある。

併しながら時に依つては、何の山にも終日霧がかかり詰めにかかつて居

ることなほもある。斯んな日は何となく蒸暑く感ずるものである。また斯んな日は風の通ひも概して好くない。

わが家の東西に村の青田の幾分が居ながら見える。その中に點點と青田を綴つて居る草葺屋根の民家は、まるで碧い海の中に浮んで居る小さな島かなんぞのやうに見えることなほもある。

日中は終日後の旭山で蟬がシャン／＼鳴いて居る。その間に龍門川の瀬の音がドン／＼聞え、また或は遠く或は近く水車の音がギイ／＼バタンと調子を取る。併し此等は皆わが郷の夏の聲である。之の句か解しかねる。

午睡の夢から起きて、欠伸しながら西に列なる青田を見渡すと、或は二ツ又三ツと編笠や白い菅笠が動いて居る。これは村の某達が沸返る水田の中に立つて、来る秋の收穫を樂みに田の草を取つて居るのである。これ等の人人を慰めがほに自然がサツと一陣の清風を送ると、稻の葉裏が白く銀色に輝つて、風の吹き過ぎる道が見える。この時人人は青田の中に腰を伸



して、無心に田面を見渡しながら一息吐く。僕も！  
 四邊に山林が多いので、勢ひ雲を起し易い。それで屢々夕立がする。「ソレ  
 今日は今に一雨来るぞ」と云ふことは、わが村を大切に抱いた青野岳が豫  
 報する。この山と龍門の瀧とは實に我が村の氣象臺である。うゝゝ！！  
 青野岳の中腹若くは頂上に黒い雲が凝然と凝つて、龍門の瀧が烈しく鳴  
 り出だすとその日は屹度無事には済まぬ。午后になると青野岳の上にかか  
 つた黒い雲が漸廣がる。「ソレ来るぞ」と云ふ中にゴロ／＼と鳴る。山の  
 方から風がドツと吹いて来る。間もなく一天墨と昏く、光る、鳴る、その  
 間にドツと夕立が降つて来る。山嶽爲に震動して、戸毎の軒から瀧が落ち、  
 天地は益々昏くなつて、世はこれから何うなることかと疑はれる。  
 何の家でも戸を閉めて、雷嫌ひは香を焼き、或は蚊張を吊つて、桑原桑  
 原と言ひながら暴れものの過ぐるを待つ。充分暴れて夕立は仙人岩を越え  
 て行く。じいと鳴く蟬の聲を聞いて、天戸を開ければザンブリ洗はれた旭

山の青葉には幾千萬の露が結んで、早くも日を受けてキラ／＼と光つて居  
 る。折からサツと冷かな風が来ると、バラ／＼と満山の露が溢れて、また  
 一しきり蟬が鳴き、今の騒ぎを忘れたやうに日が照す。  
 龍門の瀧は濁つて赭く見える。谷川の水嵩が増して其處彼處から龍門川  
 に落つる。これを一齊に受ける龍門川は俄に瀨の音が高く成つて、水石相  
 搏ち轟然奔騰するのが見える。  
 夕立のした後は實に涼しい。此處の山、彼處の森の木がぐれに鯛の聲が  
 聞えて、しつとり濡れた藁屋の軒から夕食を炊く白い烟の立つのが見える。  
 稲は夕立に生き返つて、葉毎に露の玉を止めた儘蒼然暮色の中に入る。  
 夜食の後で西側の座敷に行くと、淡淡たる水烟の中に村の一部の燈火が  
 點點として星の如く數へられ、青田を渡つて水のやうな夜風がソヨ／＼流  
 れて来る。山中に住む一得には、たとひ盛夏の候と雖も、夜間は殆ど團扇  
 の必要を感じない。

雨後の山月は實に心を洗ふに足る。一天水の如き空に月が懸ると、木と言はず草と言はず葉毎の露が玉と閃めき、涼味が更に加はつて来る。試みに村に遊びに出て見ると、潺潺と下る谷川の土橋又は獨木橋の上には必ず誰かが立つて無心に月を仰いで居る。一村の風物總て皆畫中の物でないものはない。

人二人月下に會して、相語る所を聞けば、その多くは農作物の噂に限つて居る。好んで他の是非長短を批難する都人士の生活とは全然別境で、その口に上る所は稻のこと豆の噂、若くは明日の天氣模様のことなどである。

(十二) 山中の秋色

山畑の桐の葉がふはりと一葉落つる前から蟲語唧唧屋を繞つて、山村の趣致が又大きに變つて来る。この頃の夜風は實に寒い程涼しくなる。月の光が一月毎に段段明かにな

つて来る。

この季節になると、湯治客が又續續遣つて来る。身軀を丈夫にしてかいて、秋の收穫の戦鬪に後れを取るまいと云ふのであらう。これ等の湯治客が残らず引きあげて了つた頃は、野は一面黄金色になつて、急に案山子の姿が見える。鳴子の音が聞える。それに驚いて雀の群がドツと羽音を立てて飛ぶ。

野には忽ち收穫戦が始まつて、旭に銀色の鎌が閃き、露ながらサク／＼と早稻を刈る音が聞える。空は毎日美しく晴れ渡つて、水のやうな西風が田面を流れ、華やかな日光が雨のやうに野に注ぎ、何となく氣が生ずる。早稻に續いて中田晩田の刈られる頃は、山が五色に紅葉して、空の色が藍のやうに碧くなる。この季節に入ると山には栗あり山女あり葎あり、里には柿あり柚子あり密柑あり、到る處に紅玉黄玉點點として、村は寶玉の世界に化する。

秋が此處まで進んで来ると、後山の紅葉も實に目の覺めるやうに飽麗しいが、それにも勝つて見事なのは、一曲の碧溪を隔てて我が家と相對する仙人岩の眺望である。黄葉紅葉花の如く岩を飾つて、秋禽の聲が鋭く響き、下には藍を溶したやうな龍門川の流が岩に怒つて雪を噴き、急端奔流近くべからずと見れば、また忽地にして滿然深碧の淵を爲し、水の有らゆる變化を極めて自在に下る光景と、上下兩兩相對した岩と紅葉と水との配合色彩は天下何れの處に行くも又見られやうとは思はれぬ。

この季節に於いて夕方川の流に臨むと、碧い水の凝然と動かぬ淵の面に岩の上の紅葉が紅く、又は黄色に其の影を倒に浸して居る。試みに石を拾うて投ずれば、忽地にして波紋鱗鱗として廣がり、見る見る水面の錦を割くが、また忽地にして紅黄二色の色を鮮に浸すこと前の通りである。

この頃の龍門の瀧に至つては、更に一層光彩を放つて居る。一名紅葉の瀧とも稱ふ位で、瀧の銚子口の左右の岩の邊は一面紅葉で、宛も火焰のや

うに照り渡つて居る。これ等の紅葉が夕陽の光を浴びた頃、瀧壺に近い橋に立つて仰いで見ると、瀧の上半身は眞紅に染つて、天上界の人の血が残らず此處に集つて落ちて居るかと思はれる。

更に眼を轉じて下流の兩岸を見渡せば、その音響變と激端奔流を爲し、仙人岩の方へと下る一曲の碧溪の左右は又深く紅葉に蔽はれて居る。一面火の如き木の間を透して更に下流を覗へば、わが龍門川の上流は碧い溪身を長蛇の行くが如く捻つて、彼の女は紅葉の間より出でて又紅葉の下に隠れ、また見はれて又忽地紅葉の間に没し、ただ潺潺の聲を長く残して行く。その間に見るも危い獨木橋が所所に架けてある。野翁薪を負うて渡る。その顔に紅葉が映つて人か猿か見分け難い。試みに物を問へば人語亦紅さ心地がする。

晩秋の我が村は實に總ての食物に饒んで居る。新米甘く芋甘く、椎茸甘く、鳩、雉子、山鳥、その他鴨、鴛鴦などの水禽類も亦日毎に多くなる。

この時に於いて出来秋の祭禮が行はれる。御馳走が豊富で、古代式の神樂を始め、田舎は田舎丈の賑な餘興が二日續く。村民は秋の烈しい勞苦を忘れて親類縁者の客を待遇し、飲み且歌つて人間の歡樂を極め、山家の生活に十分満足の色を見せる。祭は實に村人の最上の安樂日で、男女老若の別なく此の日の來るのを樂しまぬ者はない。

月夜の眺望は格別であるが、この季節になると、耳近く鹿の聲も聞えれば、霜に立つ狐の聲も聞える。前の仙人岩で猿などの啼くことも珍らしくない。これは獨り夜間のみには限つて居らぬ。晝間でも何うかすると、子を連れた猿が仙人岩の壁を傳つて、面白さうに木の枝などに垂下つて居るのを見ることも時時ある。

夜間は猪が出て來て野の作物を荒すので、所所に猪小舎と稱する小舎があつて、此處に村の若い者が交代に宿り、時時空砲を放つて猪を逐ふ。この時分青野岳の裾などに行くと、軒近く猪や鹿や猿などの聲が聞えると云

ふことである。イヤ青野岳まで行くには及ばぬ、我が家にも此節の夜になると、猪や鹿や猿などの聲が手に取るやうに聞える。

(十三) 冬の山里

四山黃落して初冬の候に入ると、満目の風景が又忽地一變して來る。

山は瘦せて山骨高く、里の眺望も亦何となく淋しくなる。

霜の下方も漸漸多くなつて、月の光が冴えて來る。

流水も瘦せる森も瘦せる、樹間がすつきり透き渡つて、その間から海のやうに碧い空や、夏は木の葉に遮られて見えなかつた家などが思ひがけな

い谷川の頭などに突として見はれる。

この季節に入ると、村人は男女老若共に毎朝早く星を頂いて家を出て麥蒔に多忙しい。彼等は終日野に働いて、寒烟淡淡と地上に棚引き渡つた後、星を頂いて始めて家に歸つて來る。彼等の日口にする所は、麥飯と芋大

根の類に過ぎぬが、而も營養には何等の不足もないと見えて、皆肥え太つて色艶が美しい。「健康は空氣と運動との子なり」と云ふ實證が十分に上つて見える。

既に麥蒔が終れば女は糸を引き機を織り針を持ち、男は山に薪を採る。ここに一年中の農事一切を終つて、これから先づ休養期に入るのであるが、夜は矢張夜業をして、男は繩を緋ひ草鞋若くは馬の沓などを作る。

寒いと言つた所で寒國のやうなことはない。十二月の末になると、四邊の高山の絶頂には雪を見るが、里に雪の降るやうなことは、一冬の間にそんなに度度はない。一二尺位積らぬこともないが、寒國の雪とは違つて直に溶ける。

何の家にも大きな圍爐裏があつて、冬は晝夜共に槽火がドン／＼燃えて居る。それが交際機關になつて、村民互に相往復し、上戸には酒、下戸の客には餅でも焼いて出しながら爐邊談話が大いにはすむ。

この季節に入ると、猪、猿、兎などの肉が豊富で、これに鳩、雉子、山鳥、その他色々水禽の肉など合せて、何處の家でも毎日常食に充てて居る。冬の眺望は空山落木、夕陽寒鴉、四邊の風物何となく物淋しいが、初冬の候に於ける木枯や時雨は實に詩趣に饒む。常より寒い日になると、それと云ふ間に曇つた空から幾千萬條の銀の線が仙人岩に斜に續く。ナニ銀の線ではない、それは時時この邊の山を廻る時雨である。

晩秋初冬の候から四方の山に烟が見える。これに依つて炭焼竈の在所が知れる。これも土地の眺望の一つであるが、この候になつて夕方村の方を見るとき、柿や栗などの落葉を焼く烟が所所に見える。おもひ爲しか何とな

く山里の哀れを覺える。  
寒月の眺望は實に物凄しい。殊に夜半頃に天戸を開け、地上は霜の天心に高く懸つた一輪の明皎皎たる寒月の光を仰ぎ、猿の聲など聞いた時は流石都に遠く離れて居る思ひがする。

雪中の龍門の瀧は實に實に奇景である。眞白い岩と岩との間に高く、ただ何か碧い物が懸つて見える。勿論夏より水量は少ないが、雪で四邊の静な所爲か、蹾蹾の音は却つて強く響いて、兩側の樹木は爲に震動して居る。瀧壺から流れ出る溪川の石は一面雪に深く被はれて居る。その石と石との間を潜つて龍門川へと下る水はさながら藍のやうに眼に映る。さうして所所に如何にも清い姿をした小さい水禽がチイ〜と鋭い聲で鳴きながら飛んで居る所は、實に書いても及ばぬ眺望である。如何なる詩人、いかなる畫伯が來られやうとも、ただ「清奇」の一語を發するに止まるであらう。この季節を過ぎ去つて、年改まり寒さが幾分緩んで來ると、この邊は一面に清香馥郁、暗香浮動、雪より白い梅の世界に移つて來るが、この頃では未だ鶯は谷深く籠つて居て、潺潺たる寒泉の歌を窺に聞いて居る。

(十四) 人生の起點

愛郷の說ちわいりい  
大いに然り!

世界は廣い、家は多い、父母となるべき男女も亦無數である。然るに何等の命令約束ぞ我れ俊一は、廣い世界の中で特に此の松木村の脇谷家を選んで人生の起點地と定め、始めて此の世の光を見たのは明治十二年四月二十日、折しも前の仙人岩に躑躅の花が火焰のやうに燃え盛つて居る頃であつた。

當時父俊介は二十四歳、母の玉代は十七歳であつたさうだ。祖父俊右衛門夫婦は初孫に男子を得たので鬼の首でも取つたやうに喜び、一家の愛は我れ俊一が一身に四方から集つたと云ふことである。

併しながら自分が其の時男子として此の家に生れたのは、一家の人人に取つて或は此の上も無い不幸な事であつたかも知れぬ。それを思ふと今日でも自分は我が先人に對して實に氣の毒で堪らない。

わが祖父は氣丈な人、併し人に對して洵に情深い人であつたと云ふが、初孫の我が顔を見て大いに喜んで居る所に、同國竹田の親類先から祖父が

外戚の従弟に當る人が自分の生れた祝がてら遣つて来て、二三日逗留して何か祖父に相談して、終に其の承諾を得て歸つたのが、後には我が家の爲に非常な大事件を惹起すことに成つたさうである。

本來わが脇谷家は土地で名高い歴史的名門であるので、農民ではあるが昔から代々各地の武家とばかり縁組をして居つた。現に我が母の如きも元は森の來島家の家臣の女、祖母は同國白杵の武門の出、曾祖母のお牧さまと土地の人に呼ばれたのは、竹田侯の御側役、いづれも歴歴揃であつたが、當時自分の生れた祝がてら我が祖父の許に何か相談に遣つて來たと云ふのは、わが曾祖母に當る人の生家の當主で、名は正之丞と稱つたさうである。

この人は武士の家に生れながら非常に商賣氣のある人で、維新後大小を腰から離すと共に手に算盤を取り、土地で早速酒造を始めたが、馴れぬ事として五年と續かず失敗に終つて了つた。

その後二三事業を始めて見たが、皆目算が違つて非常な窮境に立つた。

裸(賣)テ上京  
大イニヤルハレク!

蛇は口が裂けても物を吞まうとする。何處までも商賣氣に富んだ正之丞は何か又事を始めやうと思つて居る中、不圖した事が動機になつて海運業を思ひ立つた。

大いに苦鳴!

この時久振で家に遣つて來て、「御案内の通り吾も近來は大いに逆境に陥んで居つたが、今度は實に有望な事業を思ひ着いた。ここに金が一二萬圓集まれば、それで西洋形の帆船を二艘買つて、別府大阪間の海運業を遣る。これは屹度意外の利益を見ることが出来るから、當家にも何うか其の内五千圓丈は是非出して貰ひたい。さうすれば互に利益を見ることが出来るし、世の爲にもなるし、勝手なやうぢやが、吾も今日の窮境を脱することが出来る、何うか助けて貰ひたい、是非その内の五千圓丈は出して貰ひたい。當にして遣つて來たから是非この相談に乗つて貰ひたい」と言つて動かなくかつたさうだ。

此方は何うか都合をすれば、それ位は都合の附かぬこともない。加ふる

に自分が生れて祖父は非常に氣の勇んで居る所であつたので、「それぢや何ぞか都合をしやう」と言葉に餘裕も存せず云ふと、「かたじけない」と喜んで歸つて行つたが、これを心にして近親若くは知人の手から二三ヶ月の間に果して一萬四五千の金を集めたと云ふからには、彼は相當の技倆もあれば度胸もあつた人物に相違ない。

今日五千圓と云へばホンの鼻糞錢であるが、その頃一口に五千圓と云へば、殊に我が郷里の如き僻地にあつては、おもふに非常な大金であつたに違ひない。兎に角祖父は一口にその頃五千圓出したと云へば、地方としては家には相當の資産があつたものだと思える。

正之亟は其の年の夏、四五百噸積の帆船を二艘買ひ入れて、果して別府大阪間の運輸業を開始した。すると大いに調子が宜い。大分利益もありさうに見える。金主は一同大いに喜んで居た。「先見家の爲す所を見よ」と云はぬばかりに正之亟は誇つて居た。

事業をこれ丈に止めて置いたら彼も好く、金主一同も好かつたに違ひ無いが、能く泳ぐ者は溺れるで、才ある人は得て其の才氣に身を切られるもので、正之亟はこれ丈では間鈍く思つて、金主一同に血を吐せ、イヤ有らんと限りの資力を出させて、その年の出来秋の豊後米を集めて大阪に出して賣り、少く無い利益を得たのは着想であつたが、それが本で内證で米相場に手を出し、その年の冬大阪で四五萬圓の大穴をあけ、身體一ツに成つては國にも悄悄歸られず、妻子を郷里に置いた儘何處へか姿を隠して了つたさうである。

金主は一同呆氣に奪られて、誰一人愚痴を言ふ氣力さへも無かつた。わが祖父俊右衛門の如きも方に其の中の一入であつた。無理に無理をして祖父は三度に都合一萬二三千圓出したさうだが、正之亟に逐電せられて見れば、出した金は一文も手に返らず、返らぬと成れば手本は全く空に成つて、悉皆整理した結果わが手に残つた物と云つては、家屋敷の外に田畑が二三



反、まるで俄に手足を引振られた蟹のやうな状態に成つて、全く身の動きが取れなく成つたさうである。

これは自分が生れた年から其の翌年にかけての事であるさうだ。して見れば我が人生の起點は甚だ不幸不吉であつたのである。斯んな事になるやうならば、寧ろ生れて來なかつた方が勝である。而も丁度其處に打つつかつて生れて來たと云ふのは、これ抑も何等の約束また何等の命令ぞ。個中の消息になると、到底我等人間の智慧を以て正しく猜測することは云ふまでも無く不可能である。

(十五) 最初の打撃

人の家には變動があるが宜しい。若し變動が無かつたならば、世の中は甚だ面白く無い事になるであらう。言ひ換へて見れば、貧乏な家は何時までも貧乏が續き、金持の家は何處までも金持で續いたならば、人の世は誠

に興味の無いものであらう。所が昨日の長者が今日は缺碗を抱へて寒さうに人の門に立ち、昨日の貧者が今日は自働車にでも乗つて浮世を餘所に一本幾圓の葉巻莖を喫し、人から急に御前御前などと言はれるやうに成るので、たとひ何んなに貧乏しやうと、明日の御前の得意さを思ひ遣れば、今日はそれより四膳少ない一膳飯を食ふにも幾らか人間各自張合のある譯である。

併しながらそれは理窟で、自分勝手を言はせて貰へば、貧乏な時には好い方に向つて一日も早く變動のあつた方が好いが、さうで無い場合には成るべく變動の無い方が正直誰にも好ましいであらう。

然るに人生は中中人の注文通りには行かぬ。行つた日には人間が増長して始末に了へぬ。これを壓へる神の攝理か佛の慈悲か、我れ脇谷俊一は此の世の光を見る早早實に激しい人生の變動波瀾に接觸した一人であつた。それは單に生れる早早産に離れたばかりでない。ナニ金に離れた位は又

かくして始めて眞の人間が生まれぬのち!

何うにでも其の缺陷の理合が附くが、生れる早、この世に於いて最早永久  
取返すことの出来ぬ物を失つたのは、わが身に取つて實に大なる不幸不仕  
合だと言はねばならぬ。

然らば汝は何を失つた。

二歳の秋の末に方り、落葉の烟が村に立つ頃、わが祖父俊右衛門は頓死  
して世を去つたことである。祖母や両親の話に聞けば、祖父は非常に  
自分を愛して、永遠に眼を閉づる夜の夕方まで、自分を膝から離さず抱  
いて居たことである。

祖父は多少酒を飲んだが、當時從弟正之亟の爲に大變動を受けた後は、  
餘り猪口も手にしなかつたさうである。心を察して一同が酒を薦めると、  
わづか飲んでも直に酔ひ、自分の頭を撫でながら、「ア、お前に對して誠に  
濟まぬ。勘忍してくれ祖父が悪かつた」と云つて、氣丈な人がつひホロリ、  
家族に涙を見せたことである。

壯者にも大なる失望悲哀は其の精神に少なからぬ打撃を與へる。氣の確  
りとした人でも、祖父は既に六十の老體、そんな事でも害つたものやら、  
枯木のホキと折れたやうに、病ひもせず脆く果てたさうである。

一家は泣泣野邊一縷の烟にして、家の後の旭山の裏手にある祖先累代の  
墓地に御骨を葬つた日は、生憎時雨れて仙人岩に無數の銀の線が空から斜  
に續いて居たさうである。當時最後の別れを惜ませる爲に、いよ／＼これ  
から祖父の遺骸を柩に納めると云ふ前に、祖母が泣泣自分を抱いて、その  
枕頭に連れて行き、白布を取つて冷たくなつた顔を見せると、自分は石の  
やうに固くなつた祖父の死骸に手を突いて顔を覗き、莞爾笑つて「バア」と  
言つたさうである。

破産に續く祖父の死、自分に取つてはこれが最初の打撃であつた。

(十六) 有爲轉變

その時父は二十五歳であつたさうだが、良家の一人息としてこれまで大切に育つて来たので、世の生業の道には極めて暗かつたのである。併し他の良家の子弟の如く全く無能な人では無かつたので身の爲にも家の爲にも大きに好かつた。父は十三の春から二十三で妻帯する二三年前まで同國日田の咸宜園で、有名な詩人淡窓廣瀬先生の子孫に師事し、學問に大分身を入れて居つたので、この場合それが早速わが身と我が家との危急を救ふ便宜になつたさうである。未だに忘れぬ我が父は資性洵に温厚な人であつたが、頼に産に離れた上に萬事相談相手の祖父まで最早永久に亡き人の數に入つたので、一時はガツかり腰を折つて見るも氣の毒な程悲觀して居つたが、以前と違ひ僅か二三反の田畑しか無い身の上になつては、これまでのやうに毎日好いた事をして日を送つて居る譯には行かず、翌年の正月から郡役所に奉職して月に八圓宛の俸給を受けることになつたさうである。

郡役所は家から三里離れた森町に在る。往復六里の山路を毎日通ふ譯には行かぬ。森には母の生家がある。生家はあるがこれも亦當時世上の口にあつた士族の商業に失敗して、家と同じく此處二三年前あたりから非常に手元が逼迫して居つた。その頃外戚の祖父は既に没して、母の兄に當る人は妻子を携へて遠國に行つて收税吏を勤め、家には祖母と母の弟に當る幹男と云ふ十五になるのが残つて居り、大舅の許から毎月五圓宛送つて來るので、細細烟を立てて居つたさうである。父は此家に寢食を共にして役所に通ひ、毎週土曜から日曜にかけては大抵家に歸り、月給を二分して四圓は家に、残る四圓は自身の食料や小使錢などに充てて居つたさうだ。併し田舎でその頃四圓あれば大いに生活の補助になつたさうだが、祖母と母とは成るべく家の生計を約めて、少くも父に負債をさせぬやうに努力して居たさうである。

この生活が一二年續く中に自分の弟が生まれた。祖母は喜んで現在の不自由を苦にせず、「今に又この家は屹度繁昌する時節が来るに違ひない」と言つて父や母に力を附け、微祿しても人から様附に呼ばれる身分でありながら、子持でこそあれ年齢は今年が辛う二十歳、今が美しい盛り之母と一緒に野に出て何方も馴れぬ鍛錬の辛い仕事も忍んですれば、「おいとしい事ぢや」と言つて村の老人などは皆涙含んださうである。

併し人は苦しい中にも、その時その場合に於いて何うにか過して行けるもので、二三反の田畑から上る收穫に父の俸給の半を加へて一家五人は左のみ飢渴を感じるでもなく、何うにか其の日の生活を立てて世の交際にも別に義理は缺かなんだと云ふことである。

正直と勤勉とを無視する人は何んな都會の地に出ても身の榮達を望むことは先づ以てむづかしいが、何んな山間僻地に居やうと、その二ツを尊重して真面目に職務に服する人の身邊には何時となく必ず光の映して来るも

のである。

わが父は學問もあり書も達者、加ふるに以上二ツの美性を具へて居つたので、「彼様な良家に育つた人には珍らしい人物だ」と云ふ評判を上にも得また下にも得て、その後追追昇級して、奉職後四年目の四月には月給も拾貳圓に成つたさうである。

(十七) よろこび

父は此の慶に接して母の生家に飛んで歸り、祖母に向つて辭令を示し、「おッ母さん今日は役所でこれ〜でした」と言ふと、祖母は大層喜んで、「俊介さん、それはまあ結構でした、貴郎のお勤振が好いので、斯う云ふのがたい御沙汰があつたものと見えます。道理で私は昨夜大層吉夢を見ました。それも皆神佛の御加護でなうて、その有がたい御恩を忘れては行けませんよ、誰しもあること人間業ばかりで思ふやうに立身出世の出るべ

ものぢやない。何は兎もあれまあ此の事を一刻も早く松木のおツ母さんにお知らせしたいものぢやないか。誰ぞ松木の人が町に来ては居らんであらうか、一寸出て来て見まじやうかな」

起たうとするを、父は止めて、「イエおツ母さんそれには及びません、明日は丁度土曜日ですから、歸つて私から母にも話し、久振で玉代にも嬉しい便を聞かせて遣りまじやう。まだ幹男君は塾から歸つて見えませんか」  
 今茲まだ五十二歳にしかならぬが、近年これも夫に死別れ産に離れなごした爲に、一ツは太く弱つたものか、ここ一兩年以來俄に容貌の老けて来た外祖母は、急須や茶入など取出して居つたが、「ハイ彼の子は未だ戻つて参りません、何か御用がありますなら」父は直然と起上つて、「イエ別に用事でもありませんが、私は一寸出て参りますよ」祖母は急須の蓋を片手に、「今お茶でも一ツ入れやうと思ひますが」父は早下駄を穿き、「頂きますから一寸お待ち下さらんか」と言つて出た跡に、「只今」と言つて父と入違に我が

若き幹男小舅が歸つて来た。

祖母は迎へて、「松木の兄さんは今日これくであつた」と話して聞せ、母子一緒に喜んで居る所に、父がお菓子を買つて歸つて、「オ、幹男君も歸つたか、丁度好かつた。おツ母さんお茶菓子を買つて来ました。サア御一緒にこれからお茶を頂きまじやう」

「兄さん今日は芽出たら」父も莞爾、「有がたう、今月月給を貰つたら何か本でも買つてあげやう。それは左様と幹男君、明日は土曜日だから一緒に松木に行かうぢやないか」

小舅は喜び、「ハア行きまじやう。おツ母さん行つても好いでしやう。そしたら歸りに俊ちゃんと一緒に連れて来まじやうね」祖母の顔にも喜色が上つて、「連れて来て顔を見せて貰ひたいが、この前のやうに又急に歸りたがると困るは困るね」

「ハ、ハ、ハ」と息は笑つて、「困るは困るが見たいには見たいでしやう」

祖母はお茶を注いで、「そりや左様さ」と笑ひ、先づ佛前にお茶を供へお菓子しを供へて鈴を鳴し、「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經」と御題目を唱へ、佛壇の前まへを去るのを小舅は待つて、「ぢやアおッ母さんも御一緒に久振で松木にお出かけに成つては如何です、彼方のおッ母さんや姉さんが嘸喜びな

さるでしやう」  
「おッ母さん如何です、最う家の方も多分花が咲いてるでしやう。坂は少しお骨が折れるでしやうが、この節の長閑な日に三人連で、霞の棚引き波つた山道をぶら〜と花見がてら歩いて行くのも快い心持ですよ」と父も勸めて見たさうである。

祖母は考へ、「久しく御無沙汰をして居りますので、御一緒に行きたいは行きたいが、この節は何だか外に出るのが億劫でなりません、今年に別して左様ですが、若もの事でもあつたら俊介さん、死後を宜しくお頼み申しますよ」

「おッ母さん、そんな心細い事を仰つちや困りますね」と父は悚然とする。祖母は静に、「私は最う何時何う無つてもお祖師さまのお手引で結構な所に参らせて頂きますが、この世に一ツの心残りはね」と言つて、今茲十八になる小舅の顔を凝然と視たさうだ。

「そりや若もの事でもおあんななれば、申すまでも無く私等夫婦がおッ母さんに代つて幹男君は見ますが、まだ阿母此處五年や十年の間にそんな事があつて堪るもんですか。おッ母さんは未だお齡に於いては五十の坂を一ツ二ツお越えなさつたばかりぢやありませんか」と云つて父が勵ますと、「そりやまあ左様ですな」と祖母も氣を換へ、三人一緒に茶やお菓子を食べながら愉快に世間話をしたさうである。

その間にも祖母は心から父の昇進したのを喜んで居つたが、祝の意を表する爲か、この夜は種種御馳走して父を待遇し、翌朝は赤の御飯など炊いて、春の麗かな朝日の下に父の前途を祝したさうだ。

父は其儘出勤する、小舅も塾に出かけて行つたが、二人は正午殆ど同じ時刻に歸つて見ると、祖母の手に依つて、最早整然と御飯の準備が出来て居つた。二人は直に箸を執る、祖母も今日は珍らしく一緒に食べて、「サアそれぢや今日はこれから早くお歸り成さつて、おツ母さんに一刻も早く嬉しいお便をお聞せ申して下さい、まあ何んにかお喜び成さるでしやうね」父は早速身仕度にかかり、「おツ母さん阿母はお越して成りませんか」と問うて見ると、「ハイ私は又この次にでもししやう。何うかおツ母さんに宜しく申しあげて下さいませよ。このお菓子は何うか森の祖母さんから云つて小供達に遣つて下さい、これは詰らない物ですが、何うかおツ母さんに差上げて下さい」と言つて、各自に土産物を取揃へて出し、「幹男お前も御一緒に行くかい。ア、家は好いから行つて姉さんに會つてお出で、彼方さまのおツ母さんにも姉さんにも宜しく申して下さいよ。それから姉さんにね、若し都合が出来るやうだつたら、小供を連れて一度出かけて入ら

ッしやいと云つておくれ。彼方さまの御都合次第ぢや、お前が一日か二日位の事だつたら後に残つて、坊やを負つて姉さんと一緒に歸れば好いぢやないか、ねえ俊介さん好いでしやう、貴郎からおツ母さんにお願ひ申して見て下さいませんか」  
 「ハア是非伺はせる事にししやう」  
 祖母は喜んで、「ぢやア幹男さん、お前二三日位なら後に残つて、姉さんや小供達と一緒に歸つてお出でよ。今度は暫く小供の顔も見ないし、姉さんにも會はないからね」  
 「ぢやア左様ししやう」と小舅は答へて、「ぢやア兄さん徐徐出かけしやうか」  
 「ハイ行きましやう。ぢやおツ母さん行つて参ります。お一人ですからお氣をお注げなさいよ。今度は家から今に大勢遣つて来るでしやう」  
 祖母は嬉しさうな顔をして、「待つて居ります」と點頭いて、二人を表に

送つて出たが、今日は何うしたのか町外まで送つて来て別れ、二人の姿が春の山の霞の奥に消えるまで長く見送つて居たさうである。

(十八) 花の村

二人は話し、松木の方に向つて進むと、四邊の高山は麗かに霞んで、踏み行く山路は歩歩春の光に満ち、おもひがけない所にまで山櫻の花が雪のやうに白く見え、所として春禽の聲を聞かざるはなく、また所として潺湲たる溪聲の清き響きを耳にせぬはない。山を越ゆれば又山あり、水を渡れば又水あり、その間幾度か野橋、田園、茅屋竹籬の里に出づれば、百花爛熳、彩霞靉靄、芳草三里の道を辿つて玖珠川の上流を渡り、終に我が松木の村に入れば、村は花に埋もれて、青氈幾疊相連なる麥畑には、夕陽に銀色の鍬が彼此閃いて、一路の春風がそよそよと渡つて居つた。

二人は仙人岩と龍門川の流を左に見て進み、やがて右に曲つて例の長屋門を潜れば、高く見上げる左右の樺は緑い芽が吹き、屋後の旭山には所所に山櫻が自在に雪の袖を擴げて、家の周圍は紅白の花に五色の雲棚引き、夕陽を受けて色色の春禽の聲が賑に聞えて居た。二人は急いで前の石階を登つて見ると、家の前の広い庭に五歳か六歳ばかりの愛らしい男の兒が、三歳ばかりの弟の手を引いて、緑の糸が春風にぶら／＼と靡く大きな柳の下で遊んで居つた。その一人は即ち自分で、一人は我が弟の次郎であつた。

二人の顔を見るが早い自分は一瞥、「ア、お父さん、兄さん」と叫び、終らず偶、敵を認めたまのやうに我れ知らず身を翻して、この時突然我が袖に飛着いたのを覺えて居る。「オ、俊ちゃんか」父が自分の頭を撫でると、次郎がツツと泣出した。自分は二三歩前に進んで次郎を抱きあげ、連りに機嫌を取つて遣るのが、自分



には又大いに不平であつた。

併し幸ひに小舅が居て、「俊ちやん少し見ぬ間に大層大きく成つたね」と言つて抱いてくれたので、自分は幾分慰められることが出来た。

機嫌を取り取り一人宛抱いて、父と小舅とは家に入つた。その時丁度母が出て来て、これも亦嬉しうに「オ、」と喜び、父に向つて閑雅に、「お歸りなさいまし」と挨拶し、次には小舅に笑顔を見せて、「幹男さん好くお出でだつたね、おッ母さんは別にお變りもありませんか」と問ふた。「ハイ」と答へると母は優しく、「サアまあお上り、好い時にお出でだつたね、この邊は今が丁度花の盛りです」

「姉さん實に綺麗ですね」

「マア家の奥座敷に行つて、村の方を眺めて御覽なさい」

「ハイ、ちやア俊ちやんお出で行つて見やう」と言つて、小舅は自分の手を取つた。けれども自分は行かずに小舅さんばかりを遣つて遣つた。何故

かと云ふと、今度は丁度二週間目で會つた父の顔が太く戀しかつたからである。

父は問ふた。「別に變りは無かつただらうね」母も面に絶えず喜ぶ色が見えて、「ハイ別に變りもございませんでした」

「おッ母さんは」と父が問へば、「今日は多分お歸りになるだらうと仰つてお居ででしたが、只今一寸正行寺様までお出でになりましたが、最う程なくお歸りに成りますのでござんしやう」と言ひ言ひ長火鉢の側に行つて、母はお茶を淹れ始めた。自分達二人は父の側を一寸も離れずに、今日は二人で左右から父の愛を争つた。

「俊ちやんお茶を淹れますから小舅さんと呼んで入らっしゃいな」と母は自分に言ひつけた。けれども自分は聞えぬ振をして返事もしなかつた。

「好い兒だね、早く呼んでお出でなさい」と母は再び優しく言つた。「いやだ、母さんが呼んで居らっしゃい」母は笑つて父の前にお茶を出し、「俊ち

には又大いに不平であつた。

併し幸ひに小舅が居て、「俊ちやん少し見ぬ間に大層大きく成つたね」と言つて抱いてくれたので、自分は幾分慰められることが出来た。

機嫌を取り取り一人宛抱いて、父と小舅とは家に入つた。その時丁度母が出て来て、これも亦嬉しうに「オ、」と喜び、父に向つて閑雅に、「お歸りなさいまし」と挨拶し、次には小舅に笑顔を見せて、「幹男さん好くお出でだつたね、おッ母さんは別にお變りもありませんか」と問ふた。「ハイ」と答へると母は優しく、「サアまあお上り、好い時にお出でだつたね、この邊は今が丁度花の盛りです」

「姉さん實に綺麗ですね」

「マア家の奥座敷に行つて、村の方を眺めて御覽なさい」

「ハイ、ちやア俊ちやんお出で行つて見やう」と言つて、小舅は自分の手を取つた。けれども自分は行かずに小舅さんばかりを遣つて遣つた。何故

かと云ふと、今度は丁度二週間目で會つた父の顔が太く戀しかつたからである。

父は問ふた。「別に變りは無かつただらうね」母も面に絶えず喜ぶ色が見えて、「ハイ別に變りもございませんでした」

「おッ母さんは」と父が問へば、「今日は多分お歸りになるだらうと仰つてお居ででしたが、只今一寸正行寺様までお出でになりましたが、最う程なくお歸りに成りますのでござんしやう」と言ひ言ひ長火鉢の側に行つて、母はお茶を淹れ始めた。自分達二人は父の側を一寸も離れずに、今日は二人で左右から父の愛を争つた。

「俊ちやんお茶を淹れますから小舅さんと呼んで入らっしゃいな」と母は自分に言ひつけた。けれども自分は聞えぬ振をして返事もしなかつた。

「好い兒だね、早く呼んでお出でなさい」と母は再び優しく言つた。「いやだ、母さんが呼んで居らっしゃい」母は笑つて父の前にお茶を出し、「俊ち

やん何故」と問ふた。少し意向は悪かつたが、「でも僕はお父さんのお顔を  
 見てゐるんだもの」  
 父と母とはドツと笑つた。自分は居堪らずツイと立つて、奥座敷の方に  
 飛んでつて見ると、小舅さんイヤ兄さんは、奥座敷の縁側に立つて、何處  
 も彼處も花だらけの花の村を眺めて居つた。  
 「兄さんお出で」背後の方から突然呼んで遣ると、恟りして振り返り、「何か  
 い」と問ふた。自分は其の手を取つて力一杯引張り、「母さんが呼んで來い  
 と言つたの、兄さんお土産は持つて來なかつたかい」

(十九) 夕がすみ

その中に祖母は正行寺から歸つて來た。正行寺と云ふのは旭山の西南の  
 中腹に在る日蓮宗の可なり大きな寺で、前には源を曾部岳に發する一條の  
 山川が潺湲と流れて居り、南に近く青野岳が見え、西に龍門の瀧が懸つて、

此處から殆ど村の全體が一目に見え、これが又實に自然の眺望に富んだ所  
 である。

祖母は正行寺から歸つて見ると。その思はくが當つて父も歸つて居り、  
 小舅も一緒に來て居つたので、「オ、」とばかり喜んで座に上つて挨拶し、  
 自身も直にお茶の仲間に加はつたが、父が今回又昇進した便を聞くや渾身  
 歡喜に溶けんとして而も十分に其の情を發する能はず、感極まつて却つて  
 兩眼に涙を見せたが、勿論これは胸中の悲哀痛苦の遣る瀬なき惱みを表は  
 す熱い苦い涙ではなくて、人間の歡喜の最高度を不言の中に發する甘い嬉  
 しい涙であつた。「それはまあ實に此の家の面目ぢや、世間の人にも肩身が  
 廣い。ア、これは森のおツ母さんから私に態い、幹男さん何うも相済みませ  
 んね」と田舎には珍らしい三盆砂糖の袋を高く兩手に頂き、直に起つて佛前  
 に供へ、「サアそれぢやまあ今夜は何か御馳走をしてあげたいものだが」と  
 母と一緒に臺所の方へ行つた。

父は差當つて爲すべき事もない。「幹男君小供を連れて下の川縁でも歩いて見やうか」小男より自分が先に賛成して、「お父さん行きまじやう」小男も直に座を起つた。「次郎やお出で」と父は弟を抱いて遣ると、彼は嬉しさうに抱かれて、獨り父の愛を慾にした。自分は小男に手を引かれて石階を下り始めたが、矢張小男の手よりは切めては父の袖にでも垂下つて行く方が満足であつた。

下の道に下り切つて、家の方を振返つて見ると、表の庭の桃の花や旭山の櫻の花に未だ夕陽が残つて居た。

川の岸まで下りて見ると、彼んな所に何うして生へたものか、所所に雪と白い山櫻の咲いた仙人岩が高く頭の上に差懸つて、碧い水の凝然と動かぬ淵の面に白く其の影を浸して居た。

小男に負さつて此方の岸から川に覗いた大きな岩の上に登つて見ると、その下には水が石に打つつかつて噴水のやうに幾所でも飛び上り躍り上り、

四方に濕吹が雨のやうに飛んで居た。

「兄さん此の瀬の中には鮎が澤山泳いで居るでしやうね」と小男は問ふた。「ハア最う二三寸位に育つて居るだらうよ」と少し離れて父の答へる聲は判然と聞き取れぬ位に瀬の音が高かつた。イヤこの邊は瀬と云ふよりも寧ろ

漣と云つた方が適當かも知れぬ。

川上の方を見ると段段急流になつて、奔湍激流相續き、雪の瀬を爲し漣を爲し沸つてドン／＼落ちて來る所はまるで一隊の白い駒が後から後と續いて駆けて來るやうに見える。

岩の上には疊五六枚敷もありさうな平かな所がある。その四方に岩で自然と縁が出来て、小供の遊び場所にも此處は至極安全である。「兄さん下して」小男は直に下してくれた。父も次郎を此處に下して、小男と何かしながら暫く休んだ。

自分は飽いて家の方に向つて立つと、流石に長い春の日も今や次第

山の下邊から暮れかかつて、家の萱葺屋根の煙出しから白い煙が上つて居た。

父は起つて次郎を抱き、「サア最う徐徐歸らうかね、春の日の暮は何となく快い心持だね、今夜はおツ母さんがお一人で嘸お淋しいことだらう」

「ハア」と答へて小舅は又自分を負ひ、「俊ちゃん確り掴まつて居らんと危いよ。この岩の上から落して遣らうか」などと調弄ひながら岩を下りた。

その時丁度川上の方から村の喜助と云ふ四十五六になる男が此方を差して下つて來たが、父を見ると共に急に立止つて腰を屈め、「ア、これは旦那さま、何時お歸りに成りましたか」と挨拶した。

父は誰にも極めて優しい人であつた。「今日歸つて來たよ、好い時候に成つたね」彼は手に持つて居た釣竿を杖に突き、「御意にございます」と言つて、笹に通して提げて居つた何れも未だ流に放せば泳ぎさうな都合二十尾以上もある鮠や山女を凝然と見たが、何か思ふ所あるが如く、「最うお歸りでこ

ざいますか」と問ふた。「ハア最う歸ります」と聞いて喜助は釣竿を擔げ、「ぢやアお供を致しましやう」と後に續いた。父と喜助の話す聲を後に聞き、家に歸つて眼下の川を覗いて見ると、はや淡淡と川面に夕霞が立ち渡り、旭山にも同じく夕霞が微白く棚引いて居た。

喜助は先に家に入つて廣い土間を過ぎ、祖母や母の居る臺所の方に川魚を提げて行つたが、「ア、それはまあ氣の毒だね、庖刀ですか、何うも濟みませぬね」と云ふ祖母の聲が聞えた。

### (二十) おぼろ月

自分は臺所に飛んで行つて見ると、喜助は屋後の懸樋の下に行つて、今日半日の我が獲物を串に刺して居つた。

程なく臺所には川魚を焼く香氣が立つた。お腹が空いたので又飛んで行つて見ると、喜助は上框に腰をかけて七厘の紅い火で前の川魚を上手に焼

きながら、大きな茶碗に酒を貰つて、黄金液でも吸ふやうに大切に飲んで居つた。

父と小舅とは入口の十疊の間で次郎を間に自分も混つて話して居ると、喜助が微酔機嫌に成つて、板のやうな掌に唇を拭きながら左も嬉しさうな顔をして此方に出て来て上櫃にまだ四斗俵を軽石のやうに動かす兩腕の腕を張つて頭を下げ、「旦那さま御免下さいまし、何うも圖らず御馳走さまに成りましたとございます」と言つた。

母は障子を開けて現はれ、「良人川魚を澤山貰ひましたよ、何うかお禮を仰つて下さいまし」

「ア、左様か、折角釣つたのに氣の毒だね」と、父は厚く厚意を謝した。酔つた喜助は張子の虎のやうに首を振り、「何う仕りました明夜もお宅さまにお居でなさるやうでござんしたら、明日は少し野から早目に歸つて、親でも攻めて見ましやう」と云つた。

「最う徐徐鰻が釣に懸るかね」と父が問へば、喜助は又首を振つて、「それはその貴方さま、また色色其處には軍略がございます。御存じの通り龍門川の魚ならば鮎でも鯉でも鰻でも鮎でも鱈でも、この喜助にはちやんと何處に居ると云ふことを知らせて居ります。マア御免下さいまし」と舌が段段硬く成り、千鳥足を歩んで表に出たが、ちよいと立止つて向ふを睨み、「櫻三月菖蒲は五月」と唄ひながら前の石階を一步は高く一步は低く下りて行く頃は、朦朧月の光が淡く美しい夢のやうに映して居た。

母の白い手に依つて、直に朱塗の猫脚の御膳が三膳運ばれた。自分も其の中の一膳の所有者たるべき事を母に許されたので、「毎夜お客があれば好いな」と竊に思つた。

祖父と違ひ父は酒の香氣も嫌ひであつた。小舅は勿論未だ盃などを持つべき年齢の人でないで、直に御飯が始まつた。母は鉢を控へて三人の前に坐つたが、自分の顔を見て嫣然笑ひ、「俊ちゃんも今夜はお客さまのや

うだわね」と言つた。

折から祖母が現はれて、「幹男さん今夜は何にもございませんで」小男はお辭儀をして、「何うも御馳走さまでございます」と言つた。

父や小男は「この節の川魚は未だ珍らしい」と云つて、鮎や山女の附焼を食べた。自分はお汁物は好まなかつたが、豆腐と鶏卵を一緒に煎つたのをおいしいなと思つた。

「幹男君、今夜の御飯はおいしいね、三里も彼んな山路を歩いて来たからね」と父は言つた。「幾ら食べても今夜の腹は底なしです、姉さん未だお茶と間違へちや困りますよ」と言つて小男はズツとお茶碗を出した。

母は笑つて、「その御心配には及びませんよ、幹男さんのお腹は何時でも御飯の時は、宅の下の川の稚兒ヶ淵と同じことで眞個に底なしですわね」と言つた。「今召食らずにねえ」と言つて、祖母は笑つて小男の顔を見た。次郎は祖母の膝から離れて、母の膝の上に乗つた。母は白い胸を縫分見は

して、「オヤお前も此の御飯が欲しいのかい」と言つて、美しい乳房を口に含ませて遣つた。

「それちや私がお給仕しましやう」と祖母はお盆を取つて、父の茶碗を受けて引き、器用に裝つて差出すと、母は次郎に哺せながら膝を引き、「何うも相済みません」と言つた。戸外では犬が月下に腹這つて、何か家内の人に警告を與へるやうに、いやな聲を立てて吠え始めた。

## (二十一) 春の朝

一同御飯の済んだ後で、皆一ツ所に集まり、誰も彼も愉快さうに話し始めた。その内に母の膝で、次郎は思ひ出したやうにチャク／＼と乳を吸うて、その儘静に眠つて了つた。大人同志の話はそれからそれと長く續いた。四人の大人は時どくと笑ふたが、小供の耳には分らるので、自分は段々眠く成つて来て、我れ知らず何時の間にもやら崩れるやうに祖母の膝に轉げ

たまでは幾分か記憶があるが、翌朝目の覚めるまで後は何にも知らなかつた。

翌朝自然に眼の覚めた時は、今年六歳の我れ自らを一人淋しく寢床の中に見出した。ヒヨイと頭を上げて、「昨夜も祖母さんと寢たの知らん」と思ふと、イヤ／＼寢床が違つて居つた。父の枕の在るのを見て、自分は何となく嬉しかつた。「ア、昨夜は此處でお父さんに抱つて寢たのだな」さうして次には、「今夜もお父さんと一緒に寢たいものだ」と思つた。

眼をすり／＼出て見ると、父は最う何時の間にか起きて顔を洗ひ、前の仙人岩を眺めて龍門川の朝の聲を聞きながらお茶を食べ、今顔を洗つて来たらしい小舅と何か話して居つた。

自分は急に思ひ出して、撲地坐つて疊に手を突き、「お父さまお早う、兄さんお早う」と言ふと、「ハイお早う、今朝は大層早くお眼が覺めましたね、母さんにお顔を洗つて貰つて入らツしやい」と云ふ戀しい父の聲を聞いて

嬉しく早うお早う

嬉しかつた。

此の家を待つてはこそお母さん

お母さんお早う

母に連れられ裏口から出て見ると、春の朝はまだ早く、實に快い氣持であつたが、母に顔を洗つて貰つて居ると、屋後の旭山の朝霞の中から、「坊ちやんお早う」と云ふやうに、「ホー法華經」と鶯の聲が聞えた。

「サアこれでお顔が綺麗に成りました。お父さんや兄さんにお早うと申しあげるのですよ」自分は母の慈愛に饒んだ柔和な顔を凝然と見上げて、「母さん、最う言つたの、また言ふの」

「オホ、と母は笑つて、「俊ちやんはお顔も洗はない先にお早うを言つたの。マア御覽なさい、この桃の花は綺麗ぢやないか」と言つて、玉のやうな眼に凝然と仰いだ我が母の白い顔にはバツと紅く花の色が映つて、花よりも尙美しかつた。

母のお給仕で朝御飯の濟んだ後、父と小舅と自分と次郎は花の旭山を左に廻つて村の正行寺に遊びに出かけた。

花の色が映つて、花よりも尙美しかつた。

行く行く見れば何方に向いても今が花の真盛で、時を得がほに色色の春禽が春と話して居た。山の麓を長く廻つた里道の端には兩側に蓮華草の帯が二筋長く紅色に續いて居た。所所に紫色の菫も優しく咲いて居た。程なく山を廻り切ると、向ふに青野岳が見えたが、神の息かと思はれる霞がうらくと懸つて居た。高い半圓形の石橋を渡れば、右は麥畑の青い間に所所黄金色の菜の花が咲いて、蝶がヒラ／＼飛んで居た。少し上つて左に曲ると、おなじ川上に又石橋が架つて居つて、橋下には寛寛と一川の春水が下り、川端の柳の糸に金色の旭の光が煌煌動いて居た。朝の空は麗かに霞んで、雲雀のチイ／＼鳴くのが聞えた。吉野櫻の白い雲の中に在る山門を入ると、石階が長く續いて、その上に正行寺の本堂が見え、後には此方も花だらけの旭山が圓く仰がれ、本堂の庭には一面吉野櫻の雲が柳引き、間に所所桃の花の紅く咲いて居る眺望は、實に綺麗なことであつた。

「幹男君、何うだ」父は此の美觀を見上げて立ち、暫く凝然と眺めて居た。

(二十二) 飛 報

正行寺でお茶やお菓子の御馳走になり、暫く遊んで又本の道に出たのは、最早彼此十時頃で、野にも山にも温として春の光が滿ち渡り、チラ／＼と炎陽が燃えて居た。

花間に點點たる茅屋の間を時時通つて、松木温泉の方に進むと、霞を漏れて雞犬の聲が長閑に起る、蝶がヒラ／＼行方を遮る、鶯が啼く、雲雀が啼る。花は紅く柳は緑に、芳草烟を含んだ我が春の村は、實に又なく平和であつた。

浴場に行つて見ると、男女の客が充満ちて一寸入浴られさうにも無かつた。再び野路を緩く辿つて、今度は東の方から家を差して歸つて來た。時刻は既に正午に近く、家には五目鮓と鯉こくが出来て居た。早速一同



廣間に列んで、今日は愉快にお箸を取った。時候が時候であるので父も小男も鮓を喜び、また鯉の味噌汁も甘いと言つて屢々換へた。自分も大分運動したので、今日の總ての食物は身に附くやうにおいしいと思つた。「好い鯉ですな、これは何處にありました」と父が問ふと、祖母は思ひ出したやうに、「ア、これは先刻喜助が持つて来てくれましたよ」と答へた。

今噂をして居る所に、喜助が又水のスタ／＼垂れて居る大きな魚籃を提げて表の石階の上に見はれた。「オ、」と此方で一同お箸を持つた儘聲を懸けると、彼は得意さうに飛んで来て土間に魚籃を置き、「旦那さま今日は、鯉はお氣に召しましたか、イヤ今日は軍略が大あたりで、今度はこんな老爺を生捕りましたよ、蒲焼にでもして召食つて頂きましたやうか」と言つて、ヌル／＼滑る脊の黒い腹の白い大きな鯉を兩手に掴んで上櫃の上に差出した。

皆珍らしがつて禮を言ひ、上櫃に腰を下した喜助が前には、母の手に依つて鯉こくを下物に彼には何より好物の酒がユラリと大きな器に運ばれた。彼は頭に手を當てて恐縮し、「これは度々恐れ入りますな」と言つたが、呑まずに居られるものでない。高く頂いてさも甘さうに一口吸ひ、この節の川魚の漁獲法に就いて色色の秘訣を漏した。

その間に此方では十分食べて箸を納め、向ふでは十分飲んで歡樂を極め、一同愉快に世間話でもして居ると、突として前の石階の上に草鞋穿の大漢が見はれた。ハツと思つて皆目を向けると、それは森から飛んで来た儀八と云ふ男であつた。

彼は土間に一步入りも敢ず、「早速ですが彼方の御隠居さまが急に御容體がお悪く居らっしゃいます、大至急でお知らせに上りました」と息急き言つた。

「それは」と一同驚いて、我れ先にと起つは起つたが、各適當の處置を取

(二十三) 驚 魂

る事は誰にも出来ぬ程、一時は皆慌てかへつた。

流石は老功、祖母は慌てる一同を制し、「それぢやまあ幹男さんとお前達夫婦、萬一の事がありもすまいが、小供も二人連れて行つてお目にかけてが好からう。それにしても」と言ひさして、祖母が思案するのも道理、母の身躰が平時とは異ふた。

「ア、左様だ」と祖母は早速土間に下り、「一寸二人で手をかして下さらんか」と言つて藏に行き、最早幾年か使つた事の無い籠を出させて来た。

二人の男は急いで籠の掃除をする。祖母は其の間に御膳を拵へて酒まで添へ、森の使に御飯を出す。一方に母や自分達は着物を着更へる。使が腹を拵へて居る間に、喜助は何處へか飛んでつたが、屈強な相棒を一人雇つて来て、青い丈夫な杖を二本拵へて来た頃には、家では總ての準備が出来

て居つた。

母は涙含んで祖母に向ひ、「それではおッ母さん行つて参ります」と言つて、妊身な身體を籠に乗せて次郎を抱く。自分は母と向き合つて乗せられる。父と小男とは草鞋穿、一行都合八人で家を立つたのは、丁度午後一時半頃であつた。

百花爛熳として鳥語多く、彩霞芳烟錦の如き春の山路も母を始め我等一行の目には闇夜と何の變りも無かつた。

籠に揺られて何時しか眠つた次郎を母は苦しさに膝に抱き、涼しい眼に涙を浮べて、絶えず思ひに沈んで見えた。小供心にも自分までが何となく堪へ難い悲哀を覚えて来た。

「母さん、此處は何處」溪川の音の聞える或る山の中で聞いて見ると、母は涙を拭いて、「サア何處でしやうね」と外を見たが、「ア、何うか祖母さんにお怪我が無ければ好いがね」と言つて又凝然と差俯向いて了つた。

籠は男三人で交代に昇くらしかつた。父と小舅とは各自深い思ひに沈んで、互に固く口を噤み、「一刻も早く向ふに着きたい」と云ふやうに、後から續く足音が聞えた。

自分も無言の中に森の祖母の瘦せてすらりとした姿や、近年急に衰へて来た容貌などを思ひ浮べ、「何うか祖母さんの病氣が治れば好いがな」と思ひ行く中に、籠に揺られて何時となく眠つて了つた。

大分時刻の経つた後忽ち「オ、」と泣き入る母の聲に眼を覺し、急に起きて坐つて見ると、籠は道に止つて居つた。「ア、それぢや到頭死目に會はなかつたかな、それは残念な事をした」と父の歎ずる聲が聞えた。「さては」と小供心にも合點が行き、籠の窓から覗いて見ると、見馴れぬ男が一人来て、父に何か話して居り、小舅は其の側に立つて顔を被うて泣いて居た。即ち知る我が祖母の死を報じて来る第二の使と一行が今途中で出會つたのであつた。

「それぢやア御苦勞さまながら吾の家に行つて、この事を母に知らせて来て下さい」と言ふ父の聲が聞える。それぢや何うか貴下方は一刻もお早く」と言つて、使の男は祖母の凶報を齎して我が松木の方に別れる。籠は再び森の方に向つて急ぎ始めた。

籠に揺られて行く中にも、母の歎きは小供の目にも見るに見かねて自分も一緒に泣き出した。母は泣泣顔を上げて、「こんな事のある知らせか、昨夕の犬の彼の聲は、未だに耳に残つて居る。ア、私には最う生の父も母もない、此處四五年以來の事がお身體に害つたものと見える」

次郎が此の時ヒヨイと眼を覺して、愛らしい顔を眞向きに母を見て、「何で母さんはお泣きなされる」とも未だ問へず、不思議さうな顔をして居つたが、次には振返つて凝然と自分の顔を見た。

(二十四) 妙法

籠は程なく森の町に入った。折しも四點町の時計の鳴るのが聞えた。籠は程なく母の生家の門に着いた。

一同は急いで座に上つて見ると、佛壇の前に頭北面右脇の位置に我が祖母の遺骸は既に直されて、枕頭には櫛の一本花や、水や御飯や線香やお燈明などが上げられて、死骸の上には祖母が大切に居つた法華經が置いてあつた。さうして死者の傍には母の従姉に當ると云ふ森のおせい小母さんと、これも同じく従兄に當ると聞いた清水の小父さんが眼を紅くして附いて居つた。

母を始め一同が此處に入つて來ると、二人は此方の顔を見るが早いかな、  
「ア、玉代さんも幹男さんもおそかつた、時刻で言へばタツタ一時間違ひで何方も伯母さんの死目に會はなかつた。ア、何方も嘸殘念でしやう」と言つて、一同聲を上げて泣いた。

母は祖母の死骸に近寄り、「おッ母さん只今参りました」と言つて、顔に

かけてある白い帛をそつと取除けると、不斷信心の功が今日の今明らかに見えて、少しも苦痛の跡を止めず、祖母は安らかに眠つたやうに大往生を遂げて居つた。人生すやからかくの物くゎい。

母と小舅とは左右から其の顔を見、  
「おッ」と泣伏し、人人も亦涙を新にしたが、ア、無常迅速、祖母の靈は早西方淨土に歸つて人間一切の苦患を除かれ、呼んでも答へず叫んでも最期に閉ぢた眼を開いて、今一度姉弟の顔を見やうとしなかつた。

小舅は両手に固く胸を控つて泣き、「ア、こんな事になると知れば、昨日松木には行かなかつたものを、ア、殘念な事をした」と言つては又死顔を覗き、「おッ母さん貴方、私の留守の間に何うして斯んな事にはお成りなかつた。昨日は行つても今朝早く歸つて來れば、死水は取る事が出來たものぞ、ア、殘念な事をした、私は何うしても事實とは思はれぬ、こんな事に成るやうなら、昨日何うして私を彼様して松木にはお遣り下さつた。」

ア、私は昨日何故松木には行つたやら」  
 祖母の姪に當ると云ふ三十格好のおせい小母さんも、一緒に泣いて眼を紅くして居つたが、この時始めて色の青い顔を上げて、「何しろ急な事でしたね、今朝九時頃まで張物を成すつて居ましたさうですが、急にお氣分がお悪く成つたと言つて、お隣から私供に知らせして下さいましたんで、最う取る物も取り敢ず、その儘飛んで来て見ますと、斯うして仰のけにおよつた切、伯母さんと呼んで見ても眼もお開きなさらなければお返事もなさらず、二三度微に御題目をお唱へ成すつた切、漸漸にお弱り成さつて、お薬をお上げ申しても咽喉に通らず、ただスヤ／＼と昏睡なすつて居りつたや、るばかりでしたが、最う彼此一時間ばかり先に、到底お亡り成すつたんでございますよ」と精しく臨終の話をして聞せた。

父も昨日を思ひ出し、「今日こんな悲しい事になることを、豫め御承知あつた譯でもありませんまいが、左様思へば昨日此處で私にねえ幹男君、何だ

か氣になる事をお話しに成りましたよ。また私達が二人で松木に出かけて行く時も、何時もなく町外まで話しく／＼送つて来て下さつて、別れた後も長く見送つて居て下さいましたが、矢張彼が永いお別れになる所爲であつたものだと見えます」と言ひ終つて、父は泣いて居る母に向ひ、「オイ玉代二人の小供を祖母さんに好くお會せ申したか、昨日小供達を見たいと此處で仰つて居ましたぞ」

母は泣泣「ハイ」と答へて、「サア俊ちやんや、此處に来て、善く祖母さんにお目に懸つてお置きなさい、最う此の先はお目に懸る事は出来なさいよ」と言つて、また白い帛を取つて、「ソレ御覽、俊ちやん俊ちやんと仰つて、彼んなに可愛がつて下さつたが、祖母さんは最う斯う成つてお了ひ成すつたのね、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經」

自分には凝然と覗いて見た、次には顔に手を當てて見ると、慈悲滿滿たる祖母の顔は石のやうに固く、氷にでも手を觸れるやうに冷かつた。

次には次郎を母が抱いて、「ソレ御覽、祖母さんは、最う斯う成つてお了ひ成すつたよ、お顔でも一ツ撫でてお上げなさいな」  
 人人は見るに堪へず、皆顔を被うて泣いて居ると、祖母の靈魂がこれを我が聲と聞けどの差圖か、折しも何處か近くの簾で、「ホー法華經」と聲滑らかに鶯が啼いて、春の夕の和やかな風が障子の隙から通ひ、何となく物淋しい線香の烟を西に靡かせた。

(二十五) 通 夜

母の生家の近い親戚と云つては今此處に集つて居る丈、遠國に居る大男には今日母の父方の従兄に當る、即ち今この席に居られる清水の小父さんが前後二回長文の電報を發したさうだ。初めのは危篤の報知、次のは死の凶報であつたさうだ。

「兎に角この家の肝腎な人が夫婦とも居られんので相談するに困る、何方

が歸つて来るにしても、備前の岡山からと云つては急な間には合はぬ、何う云ふ都合にしたものか」と、一同評議して居ると、燈の點れる頃に返電が来た。

「歸れぬから萬事宜しく頼む、葬式の費用は後でおくる」

順番に電報を読んで見て、皆顔を見合せて居つた。「親の死ぬると云ふ事は、人一生の間に二度とは無い事ですね。親は何の爲に苦勞して子を育て置くんでしやう」と、我が温厚なる父でさへ斯う言つた。

「眞個に餘りぢやありませんか」と、清水の小父さんも憤つた。「ぢやア此方で好きなやうに遣りませしやう、なア玉代、幹男君、おせいさん」と、父は一同の顔を一人一人見た。

「頼むと言ふからにや差支は無い譯です。世間の手前もある、ぢやア見苦しくないやうに、脇谷さん、早速準備にかからうぢやありませんか」と、清水の小父さんは言つた。父は直ちに同意した。

「死者の傍で言ひにくい事ですが、嫂さんなどは却つて喜んで居らッしやるかも知れませんよ」と母は言つて、またホロ／＼と涙を溢した。

おひ／＼に近所の人人が集まつて来た。田舎は堅い、一同一切精進物で夕御飯の済んだ後は、俄に家が混雑して来た。今夜は親戚並びに近所の人が集つて、お通夜をする事になつた。

春の夜の月が上つて二時間ばかり経つた頃、お寺さまから通夜僧が見えて直にお經を讀み始め、それに續いて團扇大鼓の音が聞え、人人の合唱する御題目の聲が起つた。

母や小舅は又顔を被うて泣き出した。併し心には未だ全く祖母の死を信じ得ずに、夢のやうな氣持がして居るに違ひ無からう。父は時々小舅を慰め且つ勵ました。「最早この上おッ母さんに對する孝行の道と言つては、身體を大切に、立派な人に成つて、跡を厚く吊ふより外には仕方がない。悲しいのは道理だが、餘り悲み過ぎて身體でも害すやうな事でもあつては、

却つておッ母さんに不幸になる。彼んなに君の事を心配して居て成さつたんだからね」

「眞個に兄さんの仰つて下さる通りですよ。最う斯う成るからには家の兄さんや嫂さんは、此方の便には成つて下さらんからね」母は小舅に斯う言つて聞せながら自分が先に止度なく悲しく成つて顔に袖を被うて泣いて居た。

春の夜は太鼓の音や經文題目の聲の裡に最う徐徐と深げ初めた。自分は寝ながら其の音や其の聲を聞きながら何時となく眠つて了つた。

(二十六) 出 産

明くる日も誠に長閑な天氣であつた。この日の夕方落花の裡に祖母の葬式が営まれた。大舅が歸つて來ないので、それに代つて幹男小舅が喪主を勤めた。彼は悄悄として常に憂ひに沈んで見えた。

死骸に成つても祖母の身體の家になつた間は何となく心強かつたが、人に送られて愈々死骸の出た夜は情ない程淋しく成つた。それでも背の中は人が大勢集つて居たので幾分は紛れたが、一齊にドツと引きあげて了つた後は、まるで秋風の軒端に戦々空屋のやうに淋しく成つた。

残る哀れは小舅の身の上であつた。小舅は元來わが父を肉身の兄よりも便になるので便にして居つたが、祖母が急に此の世に居なく成つた跡では、更に一層わが父母を便にして、「兄さん姉さん兄さん姉さん」と何事につけても心から便にするやうに成つた。おもふに我が父母の小舅に對する愛情も俄に増して來たに相違ない。

母も勿論この日は祖母の柩を送つて野に立つた。野から歸つた後は祖母に代つて何かと人に家の差圖をして居つた。地方の慣例に従つて、親戚は申すに及ばず近所の人や講中の人達が再び家に集つて來て御飯やお酒などを食べ、各自佛様に御焼香をして引きあげた後も、母は近所の人達と一緒に

に後片付をして居つた。自分は其の中に母の手に依つて次郎と一緒に一間の内に寐かされたのを夢のやうに覺えて居る。その後で小舅がそつと紙門を開けて自分達の部屋に來て蒲團の裾の方に突伏し、人目を忍んで泣いて居たのも亦夢のやうに覺えて居る。

後は何にも夜の明るるまで知らなかつたが、翌朝不意と眼を覺して見ると、忽地枕頭で赤兒の泣聲が聞えた。自分は胸りして頭を上げて見ると、母は疲れてスヤ／＼眠つて居る。その傍で蒲團に包まれた赤兒が大きな聲で泣いて居た。様子は分らず自分はウロ／＼して居ると、例の青い顔をしたおせい小母さんが遣つて來て、紅い絳絹の切で拵へた酸漿のやうな物を小さい口に含ませて遣ると、赤兒は直にそれに吸ひ着いて泣き止んだ。

自分には黙つて起きて部屋の外に出て見ると、最う春の旭が高く上つて、人に意向の悪い程明かつた。父を捜して祖母の御位牌の在る部屋に行つて見ると、御位牌の前には御燈明や線香や水や御飯やお菓子などが上つて居



る。その前に父が坐り、次郎は自分より先に起きて、早ちやんと父の膝を占領して居つた。

「ソレ兄さんが起きて来た」と父は自分の顔を見て笑ひ、「起きたかい、今朝は大分長く寝たね、ヨシヨシ」臺所に行つて小母さんにお顔を洗つて貰つてお出で」と言つた。

自分は獨りで行くのは意向が悪いので、逡巡して居ると小舅が来た。小舅の眼は今朝も涙に濡んで居た。「幹男君、一寸これに顔を洗つて貰つて遣つてくれんか」

「ア、此方にお出で」と小舅は自分を臺所に連れて行つた。廣い臺所に行つて見ると、近所の小母さん達が勢居て、皆褌掛に成つて、何か賑に話しながら御膳や御桶などを洗つたり拭いたりして居つた。何處の女か知らないが、或る一人の美しい十七八の姉さんに自分は顔を洗つて貰ひ、禮も言はずと座敷の方に逃げて來ると、顔に見覺のあるお隣

の老婆さんが祖母の位牌の前に坐つてお香を上げ、數珠をかけて低聲に御題目を唱へながら拜んで居つた。

老婆さんはやがて佛前を退いて父や小舅に朝の挨拶をし、「皆さん定めて次第にお淋しいことでござんしやう、一昨日の朝の今頃は私供にお見えに成つて、今日は少し張物をする積りだなどと仰つて居らっしゃいましたが、それが最う今朝はねえ、まるで夢のやうな氣が致しますでございますよ」と言つた。

小舅は年齢丈、父が人の挨拶にも主人役を引受けて、「何うも生前は貴方には色色厚いお世話様に成りましたが、今日は最う斯うして悲しい事に成りました。また今回は雷ならぬお力に預りまして有難う存じます、嗚呼さんお疲れさまでございませう、少少取込みまして、未だお禮にも上りません」と言へば、向ふは始めて笑顔を示し、「承りますれば昨夜は何うやら當家さまにはお悦があまり成すつた御様子ですが、今度はまあお嬢さまと

やらで、皆さん嘸まあねえお喜びでございませう。それにまあ産もあ  
軽く、御母子さま共に御丈夫な御様子で、何よりお芽出たう存じます」  
場合が場合父は困つて、「ハイ」と答へた切暫くは挨拶に窮して居つたが、  
「この混雑の中に身ニツに成りまして、イヤ最う何が何やらまるで夢のやう  
な事ばかりが重なります」と言つた。

(二十七) 人生の兩端

この日は實に我が兩親に取つては、世に此の上もなく悲しい嬉しい日であつたに違ひない。實際だ、世の中に此の上もなく悲しい嬉しい日と云ふ名の附けられる日があるとすれば、この日は實に我が兩親に取つては左様であつた。  
来る人も来る人も吊詞の後で必ず祝詞を述べる。併し世間には斯んな例は昔から全く無いと云ふことでもあるまい。悲しい女でも仕方は無いのに、

直に其の場で喜びがあつたとすれば、何方かと言へば喜ばなければならぬ事である。

自分は此の日は就中おとなしくして居つた。母の産蔭を訪うて可憐綺麗な我が最初の妹の顔を覗くこともあれば、また祖母の位牌の前に来て父とおとなしく列んで坐り、お菓子など貰つて食べることもあつたが、この間には流石小兒の通有性は全く失はずに時々は戸外に出て、前の家に伺つてある小猿の赤い顔に人の見ぬ時小石を拾うて叩き付けて遣り、急いで逃げて歸つて知らん顔をして居る事も實は二三度あつたやうに記憶して居る。  
一昨日以來連りに到る飛報凶報吉報に半分は夢の心持で、わが松木の祖母は使と一緒に春風三里の山路を踏んで、この日の夕方久振で森の町に出かけて来たが、その荷物の中には悲哀と歡樂とが等分の重量を爲して居たに相違あるまい。  
「オ、これは」とおせい小母さんや清水の小父さん夫婦、その人を見ては

嬉しき悲しさに又胸の塞がる小男などに迎へられて祖母は先づ座敷に通り、人人に厚く弔詞を述べて我が外祖母の位牌の前に進み、香を焼いて数珠を手に掛け、一心に妙法蓮華經を唱へながら拜んで居つたが、最後にじつと眼を開いて位牌の前に兩手を突き、生きた人に言ふやうに、「ア、おッ母さん其の後は何うも暫く、貴方はまあ急にお参り遊ばしたさうでございませぬ、長い間のお別れでもありますまいが、お知らせに接して實に驚き入りました。ア、今頃は最うお樂になつて」と言ひも終らずホロ／＼と涙を流すと、一同皆涙を新にして凝然と顔を被ふた時は、自分も皆と一緒に聲を放つて泣きたかつた。

祖母は涙を拂つて佛さまの前を去り、此方に来て先づ小男に同情の深い眼を向けて、「幹男さん、貴郎まあ嘸殘念に思ひなかつたでしやうね、おッ母さんの死目にお會ひ成さらずにね」小男は凝然と俯向いて「ハイ」と一言答へたが、涙の落つるに先立つて、悲痛悔恨の色が見る／＼母に何處となく面

影の酷く肖た顔に満ちて動いた。

此處の悲歎を餘所にして、一間の内から丈夫さうな赤兒の泣聲が聞えた。祖母は耳疾く聞いて喜び、「ア、丈夫さうな聲だね」と言つて父の顔を見た。「今度の事變が徹へたと見え、使の者からお聞き及びでしたらうが、昨夜おそくに急に産氣附きましたな、併し産はまあ極輕かつたさうでして、それ以後は母子とも丈夫で、何うかまあ御安心下さい」

「マア何の用意もさせて寄來さずに、嘸産婦は困つた事でしたらう」父はこの時始めて笑つて、「併しまあおせいさんや、清水の姉さん達が皆居て下さいましたんでね、ですがおッ母さん一時は實に大騒ぎでしたよ、皆昨夜は死者の白無垢や經帷子を縫ふ、今夜は又急に赤兒の産衣を仕立てると云ふ騒ぎで、實に妙な譯でした」

清水の小父さんも始めて笑ひ、「死あり生あり、人間の始と終を殆ど一時に見せられたんで、實は吾も一時は間違つたが、併しまあ松木のあッ母

さんお芽出たうございました、お聞き及びでしたらうが、今度のは兼て御注文の女のお見さんですよ」

祖母は喜び、「何うかまあそんな様子で」清水の小父さんはむづかしさうな顔はしてるが剽軽者、「様子所ぢやない實際です、而も卵に目鼻と云つたやうな綺麗な兒です、早く行つて御覧なさい、アレぢや玉代さんも鼻が高

いよ」

「ぢやアまあ一寸孫を見て参りませう」と言つて祖母は起たうとしたが起てなかつた。起てぬも道理この時自分が兩手で祖母の袖を掴まへて居つた。「コレ何をします、お前も一緒に赤兒を見に行きますかい、俊ちゃん是最う度度見たでしやう」と言ひ、起ち、「オヤ次郎ちゃんは何うしましたかい」父は答へた。「次郎は先刻おせいさんが彼方へお連れ成さつたやうです」

自分は祖母に附いて産房に入つた。おせい小母さんは赤兒に又何か飲せ

て居り、母は眼を開いて次郎に何か言つて居つた。其處に祖母が自分を連れて入つて、「ア、玉代さん何うだな、生れたさうだね」と母に笑顔を見せ

て言ふと、母は喜んで、「ア、おッ姑さん、貴方お出で下さつたんですか」と言ひも果てずに顔を被うて泣き入つた。

祖母は察して、「道理ぢや、おッ母さんも到頭お宜しく無かつたさうだね、實に驚き入りました。だが餘り歎いて身體に觸つちや却つて不孝、時が時、場合が場合、此處は女子の一番大切な場所、玉代さん氣を静にして居てくれよ。私が来た、私が来た、最う何事も大丈夫、幾日なりとも安心して寝てお居でよ、ねッ。まあ今度は女の子だと言ふではないか、お手柄、お手柄、勝い、勝い、此方のおッ母さんもお淨土から、嗚、喜んで居て下さるでしやう、ドレまあ孫を見ましやうか。オ、これはまあおせいさん、まだ碌碌貴方には御挨拶も致しませんで、まあ當家さまにもねえ今回は、實に何と申さうやうもございせん」

信ある人の言葉は違ふ。祖母の口にする一言一句は誰の胸にも底まで貫く。おせい小母さんは我が祖母の吊詞を受けて色の青い顔を上げ、此處に始めて其の機會を得て、「先刻お目に懸りました時は取紛れまして、まだお悦も申しあげませんでした。今回はまあ御安産でお芽出たう存じます」

「有難うございます。またそれに就きましては貴方さまに萬事管ならぬお骨折をお懸け申しまして、御禮の申しあげやうもございませぬ。このお取込中にねえ、まあ貴方を始め皆さんは嘸かし」

「いゝえ、何う仕りました、さあまあ何うか赤さんを」

「ちやアまあ一寸、孫を見せて頂きましやうか」祖母はさも嬉しうに二膝三膝前に進んで顔を覗き、「オ、まあこれは綺麗な赤兒、丈夫さうです。ねえおせいさん」と讚歎の聲を腹の底から發して、渾身満足の人に爲り、暫く凝然と瞬きもせず睜つて居つたが、稍あり顔を上げて喜びの氣を産婦に移し、「マア玉代さん此の兒は何うぢや、まるで卵に目鼻だね」

母の顔も此の時ばかりはさも嬉しうに憂ひを離れて生々耀き、四邊に春の氣が満ちた。

(二十八) お蝶さん

わが祖父の死に就いては全然何等の記憶も無いが、外戚の祖母の死に就いては臙臙げに以上の記憶を我れ俊一は存して居る。

未だ幼少の頃に於いても自分は既に二回最も悲泣すべき人倫的大變動に接した事は前に述べた通りである。また家政の上にも自分が生れた後の我が家は決して豊などとは言はれなかつたが、これ一に我が家祖の餘徳に依つて他の方面に於ける我れ脇谷俊一が幼少時代の四圍は實に和い温かい幸福に満されて居つたと云ふ事は、是非とも茲に一言して置ければ相濟まぬ。

當時祖母及び両親の我れに注いだ愛情は今日座ながら口にするのは

是迄の  
三月廿四日  
Y.A.

ない。次に我が郷黨も誠に厚く自分を愛してくれた事は何時まで経つても忘れられぬ。實に我が生れ故郷程善いものは無いと云ふことが其の後漸く身に滲みて好く分つて来た。

いかに物持の家の子弟であらうと、他の家の小供に對しては皆その名を呼ぶにも拘らず、獨り自分に對してのみは一村擧つて皆「坊さま坊さま」と呼んで居つた。また何か珍らしい物でもあれば正行寺の御上人さまを始めとして、必ず自分に態持つて来て下さるか、又は必ず取つて置いて下さつたものである。

郷黨は皆斯くの如く常に自分を愛してくれたが、中にも別して幼い自分の身を温かに愛護してくれた可憐花の如き同情者があつた。この人の事は自分は未だに忘れ切らぬ。人は可愛がつて置くべきものだと、自分は其の人の事を想ひ浮べる度に思ふ。

それは誰であつた。隣の一人女のお蝶さんであつた。

ただこれ丈では能く分らぬ。然らば自分は此の小女を永久に紀念する爲にお蝶さんの事を少し話さう。

自分の家の長屋門を出て、グラ／＼坂を草深い里道に下り、瀬の音高き龍門川の流を右にして半丁足らず行くと、丁度自分の家と同じ方向に二尺幅位の道がある。この道を突當まで行くと、旭山を右に龍門川を左にして西南に向つて立つた前に廣い庭を有つ大きな萱葺屋根の農家が只一軒あつて、前には正行寺の前を流れる一曲の山川が旭山の下を繞つて此處に来て、この家の前を流れて龍門川と合するやうに成つて居る。これが即ち我が友お蝶さんの生れた家である。

當時お蝶さんのお父さんは未だ四十前の人で、名を嘉右衛門さんと言つた。一家は五人暮して先代夫婦當主夫婦、それに一人女のお蝶さんを加へて家の人が五人、外に作男と作女とが一人宛居り、農を専業として誠に裕福な生活をして居つたが、老人夫婦と云ひ又當主夫婦と云ひ何れも皆農民

には珍らしい上品な人達ばかりであつた。  
 古き昔を跡ぬれば此の家の祖先は例の平家山種族の一人で、前に黄金の  
 采配を先祖の遺物として未だに大切に保存してあると言つたのは、實に此  
 の家のことである。祖先より繼承した我が脇谷家の家名と血統とを生命に  
 かへて尊重した祖父俊右衛門ですらも、「隣ならば自然縁組をするやうな事  
 があつても差支はない」と言つて居つたさうである。  
 お蝶さんは自分よりも七ツ年長の娘で、色の白い眼の涼しい、鼻筋の通  
 つた口元の最も愛らしい少女であつた。十二三の時分から村でも皆評判し  
 て、「今に何んな美しい娘さんになるだらう」と云つて居つた。  
 向ふも名門此方も多少歴史のある家、その邊の祖先崇拜的一致も自然あ  
 つたには相違ないが、兎に角少し離れてこそ居れ隣合に住んで居たので、  
 何等の血族關係は有たぬにもせよ、兩家は村中でも特別懇意にして居つた。  
 この縁故からお蝶さんは好く自分の家に遊びに來たものである。何しろ

自分よりは七ツ年長の子であるので、小さい時から自分を肉身の弟のやう  
 に思つて可愛がり、自分も亦實眞の我が姉のやうに慕つて居つた。それで  
 自分は自然この娘の名は呼ばずに、物の言ひ覺えの時分からして「姉さん  
 姉さん」と呼び馴れて居つた。  
 姉さんはこれも地方の名門から見えて居つたお母さんの優しい氣を其  
 儘禀けて、ただ其の顔の美しいばかりでなく、その心も亦極めて柔順しい  
 娘であつた。  
 小さい時から自分の言ふ事ならば好く容れて、何んな無理な事を言はう  
 と、決していやとは言はなかつた。それで自分は幼少時代は一日も此の少  
 女が我が傍に居なければ生きては居られぬ位であつた。  
 風でも引くか、虫でも起つて氣分の勝れぬ時などは、殊に此の少女を慕  
 ふことが烈しかつた。然う云ふ時には一日家に止めて置いて、夜も傍に寝  
 して返さなかつたものださうである。

若し自分が何か無理な事でも言つて泣くと、「そんな分らぬ事を云ふと、最にお隣の姉さんは見えなくなりますよ」と母が言ふと、自分は直に泣き止んださうである。また何んなに泣いて居る時でも、「ソレ姉さんが」と言へば直に泣き止み、小さい體に抱つたり負さつたりして、自分は嘻嘻として喜んだものだと言ふ事である。

然う言はるれば當時の記憶が未だに茫然と幾分胸に残つて居るが、その頃のお蝶さん、イヤ我が大切な姉さんは恰是海棠の蕾のやうな溫柔しい可憐、さうして美艶しい顔をして居る少女であつた。

(二十九) 花御堂

自分は此の可憐なる山村の一少女と益深い馴染を互に重ねながら五六歳になつた。その時この親愛なる姉さんは、その齡恰も十二三歳であつた。この頃になつては姉さんは、紅い綺麗な帯を締め、本の包や石盤を抱へ

て、毎日村の小學校に通つて居つた。

「俊ちゃん歸つてから又一緒に遊びましやうね、おとなしくして待つてらつしやいよ」と言つて、門の前に獨淋しさに立つて居る自分の方を振り返り、東に向つて龍門川の堤に沿ひ、學校に行く姉さんの戀しい後姿を未だに夢のやうに記憶して居る。さうして「自分も早くア、して姉さんと一緒に學校に行くやうに成りたいな」と思つた事の記憶もある。

自分は當時毎朝時刻を計つて庭前の石階を下り、雨の降らぬ日は例の長屋門の外に立つて姉さんの通るのを待つて居つた。

夕方になると此方から行かねば向ふから必ず来て、「俊ちゃん」と呼ぶのが例であつた。自分は直に飛び附いて、日の暮れるまで一緒に遊び、明日を契つて姉さんが振り返り振り返り前の石階を下へくと降りて行く時は、何となく悲しくて、二人の家の一つでないのが小供心に怨めしかつた。

この懐かしい少女に就いて、一一わが幼時の記憶を呼べば、春夏秋冬を



通じて、實に色色な記憶がある。  
 例へば當時の春に就いて考へて見ても、一緒に蓮華草を摘みに行つた事、胡蝶飛ぶ菜の花の畑の傍で春の光を恣に浴びながら麥笛など作つて貰つた事、一緒に正行寺の花を見に行つて、御上人さまにお菓子や紙に包んで頂いた事、炎陽燃ゆる野路に立つて、麗かに霞んだ空の雲雀を見上げ、「姉さん彼の鳥捕つて」と言つて困らせた事、青野岳の霞んだのを見て不思議がり、「姉さん彼は烟か」と聞いて、「烟ぢや無いわ」と言つた切、向ふも返事に困つた事、また春を尋ねて知らず識らず二人で龍門の瀧の下まで行き、橋の上で遊んで居た時、向ふの川端で火を焼きながら怖い顔をした二人の乞食が何か食べて居るのを認めて、自分が怖がつて泣き出すと、姉さんも怖がつて慄へて居る所に、折よく村の人が通りかかつて二人を連れて歸つて来てくれた事、その外今日まだ明確に記憶に浮ぶ事が澤山あるが、中にも四月八日になると、未だに毎年必ず思ひ出す事がある。

人も知る如く四月八日は灌佛會、即ち釋迦さまの誕生日である。この日諸方の寺に参ると、我が地方でも矢張種種な草花で屋根を葺いた綺麗な花御堂が出来て居つて、その中にお釋迦さまの立像が小判形の浅い桶の中に祀つてあり、参拜者は可愛竹の柄杓で甘茶の温かい湯を佛さまの頂に灌ぎかけることは、他の地方ですると少しも變りはない。  
 これは何でも森の祖母が亡なる前の年あたりであつたと思ふが、或る年の四月八日に姉さんが自分を連れて隣村の松禪寺と云ふ禪寺に参詣に出かけた。するとこの綺麗な花御堂が出来て居つた。小供心に面白いで、自分分は姉さんの真似をして、お釋迦さまの頂に甘茶を灌いで居る中に、何と思つたものか、自分は急に其の可愛竹の柄杓が欲しく成つた。自分は何時までもそれを放さず散散玩弄物にして居ると、他の参詣者が迷惑して、「それを此方に貸して下さい」と言つた。けれども自分は頓着せず、相變らず其の柄杓を獨りで持ち續けて居ると、姉さんは他の人達に

氣兼をして、「俊ちゃん早くお進みなさいな」と注意した。自分は止められない程氣に適つたので、何時までも何時までも遣つて居て動かなかつた。すると姉さんは困り切つて、「ちやア私先に獨で歸るわ、俊ちゃんは何時までも此處で左様して居らッしやいな、また何時かのやうな怖い乞食が來ても」と言つて、自分を其處に一人棄てて歸る眞似をしようと、自分は直に其の柄杓を人に渡して立つたは宜いが、忽地火の附いたやうに泣き出して、花御堂の前を動かかなかつた。この時自分が泣いたのは、その柄杓が欲しいのだ、一ツは姉さんに棄てられたのが悲しかつたのであつた。

姉さんは其の泣聲に驚いて立ち戻り、何と言つて賺して見ても、自分が其處を動かぬので、「ちやア入らッしやいな負つて歸るから」と言つて、可哀さうに未だ幅のない背中を自分の方に出した。

自分は其の時負さるのが嬉しくて、一は足が疲れても居た爲か、柄杓の事も何もかも忘れて直に負さつた。姉さんは我慢して村外までは負つて來

たが、これから先の坂が越えられさうにも無かつた。

「この坂の所丈少し歩くのね」と言つたが、自分は「いやだ」と言つて下りなかつた。「ちやア一寸俊ちゃん下りて頂戴な」と言つて、自分を下してホつと息を吐く姉さんは最うこれまでで疲れ切り、骨の折れたのと熱いので綺麗な顔が眞紅になつて、額に一杯汗が出て居た。

何うしても自分が歩かぬので、可哀さうに姉さんは紅い帯を解いて、それで自分を十文字に小さい體に縛りつけ、また負つてよろけながら歸る中に、自分は何時となく姉さんの背中で眠つて了つたので、歸りに姉さんは非常に困り、里程わづか十四五丁の所ではあつたが、松木の入口に來た時は、最う一歩も動けなく成つたさうである。自分は四邊に躑躅の紅く咲いて居る山の中で、最う我慢にも眼を開いて居られない程眠くなり、兎もすればぐらりと後に頭が反ると、その度毎に姉さんはよろけては立止り、「俊ちゃん眠ちやアいやよ重くなるから」と言つたが、終には耳も聞えず目も

見えなく成つて、引き入れられるやうに姉さんの背の上で終りに失敬して了つたが、その眠つた時の心持まで、この日の事は何うした加減か未だに好く覚えて居る。

### (三十) 馬上の花

話は前に後つて其の時我が祖母は森に止まり、産後の母を撫恤つて大切に看護して居つた。母は姑の温かい情を感謝し、自身でも成るべく體に氣を注げるやうにして居つたが、一方には家の事が氣に懸る。父も同じく家を氣遣ひ、既に七夜も事なく済んだので、父は或る時祖母に向つて、「おつ母さん三人とも家を留守にしては何うでしやうかね」と問ふた。何うして置いて出て來たのか、祖母一人は安心して、「ナニ心配しなさんな、家は氣遣の無いやうにして出て來ました、切めて此方のおつ母さんの三十五日までも居て、お後を吊ひながら産婦を見て遣りたいが左様も行かぬが、最

う一週間居て、おつ母さんの二七日を済して歸る位の事は別に仔細ありません」と言つて止まつて居つた。

「悲歎の後だから何うあらうか」と言つて、母の健康を皆内氣遣つて居るやうだつたが、一は祖母の介抱が能く行き届いた爲であらうか、母の肥立は至つて好く、乳も能く出る食物も進む、最早この分ならば殆ど心を勞する点は無くなつた。「これぢや最う無理に枕直まで居る必要もない」と見て、既に祖母の二七日も済んだので、後はおせい小母さんに頼んで置き、明日あたり次郎丈連れて、祖母は松木に歸らうと言つて居ると、或る日の正午前に乗掛を附けた一頭の馬が門の前に來て止つた。父は出勤中であつたが、祖母も自分も小舅も丁度家に居た。自分が一番先にそれを認めて飛んで出て見ると、ア、嬉しい、斯うして母の生家に來て居つても、毎日忘れた事のない姉さんと小母さんとが今馬から下りてる所であつた。

「姉さん小母さん」

「ア、俊ちゃん」

「オ、俊ちゃんですか」

飛んで家に歸つて此の事を知らせると、「オ、それはまあ」と言つて、祖母が急いで飛んで出て、「サアまあ何うぞ此方へ、お蝶さんも小母さんも好くこそねえ、遠方態御親切さまに」と喜び／＼家に案内した。母も大層喜んだ。お蝶さんはイヤ姉さんは町に來て、谷深く棲む鶯が偶里に出たやうにおぞ／＼し、小母さんの後に隠れるやうにして座に上つた。

小母さんは祖母や母に會つて、先づ叮嚀に吊詞を述べ、次に悦を言つて、赤兒を見て、「ア、お綺麗な赤兒さんで居らッしやいますことね、まあ皆さん何んなにかお嬉しいでしやうね」と言へば、祖母は嬉しさに自慢して、「ハイ今に此の兒はお蝶さん見たやうに別品さんになるのでございませうよ」と言ひ、次には姉さんの今日は格別美しい愛らしい顔を見て、「これから又

この兒をお頼み申しますよ」と言つた。

それは可いとしても怪しからんのは今日の姉さんの態度であつた。自分には碌に口も利いてくれずに、さも嬉しさうな顔をして、ただ赤兒の顔ばかり見て居つた。自分は心の中で憤慨して、「斯んな事になるのなら赤兒なんか生れて來ない方が餘程好かつた」と思つた。

此處で互に一わたり話が済むと、小母さんは祖母に案内して貰つて、外祖母のお位牌の祀つてある部屋に入つて、お香を焼いて姉さんと二人で拜み、亡き人の面影を思ひ浮べて、「マアねえ今年のお正月に松木へお來し成すつた時は、私供にもア、して態お立寄り下さいましたか、彼の時が最うお別れでしたかねえ」と言つて涙を拭いた。

未だに忘れぬ、この日小母さんのお土産は實に豊富なものであつた。佛様への御供物やら、母へ見舞の餅やら菓子やら、また赤兒への祝物やら山のやうに積みあげた。これは他人交際では無くて、親類交際としても非常

に念の入つた方であつた。  
 祖母も母も「マアお氣の毒さまでございますね」と言つて喜んだ。「いゝえ最うホンのお印ばかりでございますの」と小母さんは言つて、次は小舅に向つて、「貴郎まあ嘸お淋しく居らっしゃいますしやうね、お後の事がお済みでしたら、チト松木の方にお遊びにお出かけなさいましな」と言つて居つた。  
 母の生家は廣かつた、二階にも八疊の立派な座敷が二間列んで出来て居つた。自分は此處に無理に姉さんを引張つて上つた。二階に登つて二人切になると、ア、自分が先刻姉さんを怨んだのは間違であつたと云ふ事が好く分つた。四邊に誰も居なくなると、姉さんは忽地不斷の通りの姉さんになつて、自分の兩手を確り握り、「俊ちやん私貴方に會ひたかつたわ、何故斯うして何時までも何時までも森に居て家へは歸つて來なかつたの、私眞個に毎日淋しくて淋しくてしやうが無かつたわ、俊ちやんは私の事は忘れ

て居たでしやうが、私は寝ても起きても俊ちやんの事ばかり思つて居てよ、今日はこれから一緒に歸らなくツちや私いやよ」と姉さんに言はれた時は、自分は何うしやうかと思ふ程嬉しかつた。さうして何となく悲しくなつて、その儘姉さんの小さいお膝の上に泣き伏すと、姉さんも自分の小さい背中に泣き伏し、二人一緒に暫く戀し泣きに泣いた。

(三十一) 告 別

母は未だ産褥に寝て居る、祖母には土地の様子が分らぬ、内内困つて居る所に、今日も亦折よくおせい小母さんが遣つて來た。小母さんは青い顔に點頭いて、直に裏口を脱けて町に買物に行つて來て、色色御馳走してお客さまに晝食を出した。自分も一緒に御飯を食べた。

この日は丁度土曜日であつたので、父も早く歸つて來て、姉さんや小母さんを厚く待遇したので、自分はそれを見て此の上もなく満足した。

三時頃になると、小母さんは最う歸ると言つて、急に告別をした。姉さんは美しい眼で自分に合圖をした。自分は直に其の意を覺つて、「僕も一緒に歸らうよ」と言つて立つた。けれどもこの日は歸られぬ事になつた。併し斯う極つた結果は悲しくなかつた。悲しい所か實は嬉しくて堪らなかつた。

小母さんが急に告別を仕出した時に、自分は一寸悲觀したが、一同承知しなかつた。父も母も祖母も小舅も無理に止め、「遠方態、お來し下さつたんですから、今夜は是非一夜宿つて頂かなくてはならん。明日は母も歸る事に成つて居りますから、是非御一緒に願ひたい」父が真先に斯う言ふと、母も「是非何うか」と心から止め、祖母も返す氣はないので、何と言つても皆で承知しなかつた。

それで到頭小母さんも姉さんも今夜は宿つて、明日祖母と一緒に歸る事になつた。幸ひ森に今夜から人形芝居が始まる事に成つて居つた。僅か三

里許隔たつて居つても、又と云つては一寸出て來る譯に行かぬ。母の發意で小舅が案内し、お客さま母子に祖母、自分、おせい小母さん、都合六人で今夜見物に出かける事になつた。

留守は父と母、後は残らず出かけて行つた。これは大きに自分にも氣に適つた。初めは面白がつて、姉さんと列んで熱心に見て居つたが、何時の間にか眠つて了つた。小舅の背中から下されて、眼の覺めた時は最う家に歸つて來て居つた。小母さんは大層喜んで、「お蔭さまで久振で芝居を見せて頂いて、實に面白うございました」と父にも母にも厚くお禮を仰つた。姉さんも太く喜んで居る様子、祖母やおせい小母さんの顔にも十分満足の色が上つて見えた。

それから間もなく一同で、お茶やお菓子などを食べ、今夜の人形芝居の話などして床に入つた。今夜は久振で姉さんと一緒に寝た。明くる朝眼の覺めた時は、小母さん達は最う起きて居た。

臺所に行つて祖母に顔を洗つて貰ひ、座敷に来て皆にお早うを言つた。誰が何時買つて来たのか、小母さん達にあげるお土産物らしいのが、既に座敷の床間の上に積んであつた。

ゆつくりと朝御飯を済まして、祖母は歸る仕度をしたが、隣から馬が來てるので丁度宜い。着物だの土産物だの、總て皆乗掛の下附に入れて貰つたので世話なしたつた。

母は未だ寢て居るし、次郎を後に残して行つては困るので、弟丈は祖母は是非連れて歸る筈だつたが、自分までは豫期しては居なかつたらしかつた。けれども自分が急に歸ると言ひ出すと、祖母は少しも拒まずに、「ぢやあ一緒に歸りませうよ」と言つた。「そんなに皆一緒に歸つては祖母さんがお困りだよ、お前丈は後に残つてお居でなさい」と母は止めた。祖母は笑つて、「何うして母さん、姉さんのお顔を見ては何で此の兒が後に残りませうに」と言つた。「大人の癖に能く小供の心が分るものだ」と自分は窃

に感心して、凝然と祖母の顔を見た。

早書を済まして、いよ／＼出發する事に成つた。小母さんは皆に厚く禮を言つて、各自に告別をして、「貴方まあ何うかお身體を精精御大切に成すつて下さいませよ」と母に言つた。「有難うございます、私も最う直に歸ります、何うか皆さんに宜しく、何分家を宜しくお願ひ申します。これはまあお蝶さん、折角お出で下さいましたのにねえ、何のお構ひも出来ませんで、何うか又我儘者を宜しくお頼み申しますよ」と母は言つた。

祖母は外祖母の位牌にお線香を上げて、お別れの御題目を唱へて居つたが、この時此方に出て來て、「それぢやまあ幹男さん、貴方何うかお身體を大切にして下さいよ、これは何うも永年お世話さまに成りました」小舅は別れを惜んで兩手を突き、「何うも永年有難うございました」と言ふのが精一杯らしかつた。

「それぢやあせいさん、永年お世話さまに成りました。何分何うか跡の所

は貴方にお頼み申しますよ」祖母が告別をするど、おせい小母さんも別れを惜み、「何うも永永有難うございました。斯うして毎日上つて居りましたも、何のお役にも立ちませんが、お跡の事は何うか御安心成すつてお立ち下さいまし」と言つた。

祖母は父に二三の注意を與へ、それから母に別れを告げた。「それぢや私は一度家に歸つて見て、四十九日に又出て來ます。何うか精精身體を厭つて、切めて枕直の濟むまでは、決して輕擧な事をして下さるなよ。家の事や小供の事は少しも心配する事はありませんよ。ねッ、人間は斯う云ふ時に切めては少し身體や心をゆつくり有つ爲に、不斷無事な時に働いて置くのです。返すくも無益な事に氣を使つては成りませんよ。何うか一日も早く無事に肥立つて下さるのを、私は家から祈つて居ります」母は袖に熱い感謝の涙を拭いて、「何うもおッ姑さん濟みません、ぢやア何分お頼み申します。お事多うございませしやうが、ぢやア四十九日には、また何うか是

非ね」祖母は點頭き、「ハア來ますども、その時一緒に歸らうね、俊介さん、ぢやアお前何うか玉代に精精氣を注いで遣つて下さいよ。可哀さうに最う此方のおッ母さんもお居でなさらないしね」と言つてホロリとしかけたが祖母はギイと齒をかんで笑顔を見せ、「ア、それぢや最一度お前のお顔を見て祖母さんは歸らうかね、まあ可愛ぢやないか、今に直に又祖母さんが迎ひに來ますよ、それまでに大きく成つて祖母さんの來るのを待つて居るんですよ」と言つて愈母に別れて出かけると、母は「何うかお大事に」と言ひながら姑に別れを惜み、顔を被うて泣いて居た。

### (三十二) 初夏の山路

小舅とおせい小母さんとは町外まで自分達を送つて來て別れた。自分と姉さんとは馬に乗り、祖母は次郎を父の和かい兵兒帶で確りと負して小母さんと何か話しく後から附いて來る足取の達者さ加減は、未だ



まだ中若い者の及ぶ所でないと思つた。

未だに善く覺えて居るが、祖母も小母さんも袴を着て裾を高く端折り、何方も白い腰巻に白い足袋、それに麻裏草履の新しいのを穿いて居た。

森の家を立つ時に、小母さんが是非次郎を負すと云つたが、「マア初めは私が暫く斯うして参りましやう、山に懸つて疲れましたら其の時に代つて頂きます」と言つて祖母が負つた。

小母とあせい小母さんとに町外で別れる時、祖母は又懇懇と跡を頼んだ。二人は祖母の歸るのを心細がる色が顔に明明と見えて居た。いよ／＼最後の「左様なら」を告げ合つて、別れて進んで大分来た頃、馬の上から振り返つて見ると、二人は未だ歸らずに町外の丘の上に立つて、此方を凝然と見送つて居た姿は、小供の目にも何となく哀れに映つた。

祖母も振り返つて二人を見て、「ア、未だ何方も立つて居る、僅か二里か三里の間でも、斯うして互に別れるのはいやなものですね」と小母さんに言

つた。

「眞個に左様でございますよ」と言つて、小母さんも亦後を振り返つて見た。

「可哀さうなのは家の嫁の弟ですよ。これからまあ何うなる事でしょう」と、祖母は小母の身の上に深く同情して言つた。

「私供にも一人彼位の年配の仁を欲しいんですが」と言ふ小母さんの聲が後に聞えた。自分は此の時又遙に小母の方を振り返つて見ると、此方の道は漸坂に懸つて山に没せんとし、最早向ふと今互に相見えなくなると云ふ所であつた。

この時向ふの二人は一齊に頭を下げて、此方に向つて腰を屈めるのが遠くに見えた。此方では祖母も小母さんも一齊に腰を屈めて、終に最後の別れを告げて山路に懸つた。

小兒は憂ひを忘れ易い。最う向ふの姿が見えなくなると、それと同時に自分は何にも打忘れて、眼も心も山の景色に捕はれたが、祖母や小母さん

は相變らず、死者の事や母の事や小舅の事などを哀れに話し合ひながら後から馬に續いて居つた。

自分は姉さんに確り抱つて馬上の人と成つて居つた。イヤそんな事は最う言はずとも、交通機關の不自由であつた當時の田舎の風俗を御案内の方は善く御存知の筈である。そんな事は最う此處に諄く述べる必要は認めぬが、自分は當時の我が記憶を永く残して置きたい爲に、今少し序に茲に述べて置きたい事がある。

我我人間は怠け出すと、一日一月一年などはおろか、一生怠け通しに怠けて暮すやうな不心得者も世には何うかするさあるが、自然は雨が降らうが風が吹かうが日が照さうが照すまいが暫くも怠けては居らぬ。

僅か此處一二週間前籠に乗つて此邊を急いだ時は、百花爛熳鳥綿蠻、春の盛は彼の日であつたが、今日この邊を通つて見ると、總ての紅白散つて痕なく、春は何れの邊にか歸つて、満山唯見る新綠蒼然、幽草離離として

夏を此處に育てる處に、忽ち見る饑饉として所所に紅きものは是れ何ぞ、言ふまでも無く初夏の山路を彩る躑躅の火燭であつた。

「ヤア綺麗だなア」この光景を見るや否、自分は馬上に躍り上つた。「マア俊ちやん危くつてよ」姉さんは驚いて後から抱き締め、「家に歸つて仙人岩の躑躅の花を御覽なさい、まだく斯んなものぢや無いわ」と言つた。

振向いて、「姉さん、最う前の岩の躑躅が咲いたの」

紅い唇は再び動いて、「咲いてるわ、今が丁度眞盛よ」

「左様」

「だから私は俊ちやんを迎ひに行つたんぢやアありませんか」と言つて自分に抱き着き、頬に頬をびつたり着けたが、これが何うして忘れられやう、その時の我が姉さんの美しい顔には若葉の影がチラ／＼動いて呼吸には薔薇の匂があつた。

初夏の空は美しく晴れ渡つて、言ふまでも無く日光が満山の若葉に一面

燦燦と金色の玉を撒いて居た。  
 溪聲潺湲山青、坂に懸ればシャンコくと緩く馬の鈴が鳴る。薰風三里里に出ること稀にして、自分は何時となく姉さんの胸に靠れ、耳に口を當てて、「俊ちゃん今日も亦眠つて人を困らせちやいやよ」と言ふ聲も漸漸遠くに聞いて、終には何にも知らなくなつた。

(三十三) 淋しい顔

祖母が自分達兄弟を一時に連れて引きあげた後は、森の家では頓に淋しく成つたさうである。殊に未だ産褥に居る母などはその淋しさに堪へかねて泣いたさうだ。父も淋しい小舅も猶淋しい。斯う成つて來ると、皆一齊に死んだ人の事ばかり思ひ出し、其處でも此處でも濕りかへつて居る中に、何にも知らぬ赤兒ばかりが、時時おもひ出したやうに大きな聲をあげて、「オア、オア、」と元氣好く泣いたさうだ。さうしてこれが一同の人に取つ

ては、誰も彼も弱り切つて居る中に幾分の生氣を感ずる興奮劑になつたと云ふことである。

母の枕直即ち出産後二十一日間経つまでは、おせい小母さんが祖母に代つて煮炊の世話やら産婦の世話やら赤子の總ての世話まで一切手一ツに引受けて遣つてくれたさうである。

このおせい小母さんと云ふ人は、親切な人ではあるが、誠に不仕合な人であつた。母とおなじく此の人にも一人の兄があるにはあるが、これも今では家を舉げて遠國に言はば移住して了ひ、郷里には既に兩親もなく又財産と云ふやうな物もないので、行つた切最早五六年も歸つて來たことがない。ただ一人の妹に一度も顔を見せぬばかりか、盆にならうと正月が來やうと葉書一枚寄來すでも無かつたさうだ。

それでおせい小母さんの現在は何うだと云ふと、まだ三十に届くか届かぬ若い身そらで、此處七八年以來は便ない寡婦生活をして居るのであつた。

元來この婦人は至つて薄命な人で、十歳ばかりの時に両親に死に別れた。けれどもその時は未だ母の生家が好かつたので、引き取つて育てて十九で嫁に遣つた。二十二で復寡婦に成つて戻つて來た。一年家に置いて又嫁つた。それは今籍を置いて居る淺井と云ふ家であるが、まあ何と云ふ不仕合な人だらう。明くる年一人の男の子が生れたのは芽出たいが、その兒がやつと初めの誕生を過ぎたばかりの所で、二度目の良人も亦死んだ。

此處も矢張貧乏士族の家で、夫の遺産などと云つては勿論ない。併し家屋敷丈はあつた。子でも無ければ歸りもしやうが、前とは違つて左様簡單には行かぬ。小母さんは其處に止まり、家の大部分は人に貸して、自分母子は裏の離家の六疊に上ぐる烟も細細住ひ、月月上る二圓の家賃に、お針が達者なのでこれから上る物を加へ、母子二人が何うか斯かうして口を濡し、而も其の中に去年の春から自分より二ツ年長の勇吉と云ふ子を學校に上げ、この子の生ひ立つのが今日では切めての樂みであつた。

未だ若いので祖母は可哀さうに思ひ、死ぬる一月ばかり前も子供を連れて訪ねて來た時、姪叔母の間であるので、互に種種内曲の話を仕合つた後で、祖母が篤と其の了簡を糺いて見ると、姪は熟熟人の世を疑ひ悞れる色を面に見せて、小母さん私のやうな不仕合な者は、最う〜連子などをし餘所に行つて、この上の苦勞をするのは斷然いやです。それよりか三度の物は腹一ツ杯頂かれないにしても、切めて心丈なりとも我が任意にして、この兒と二人で暑さ寒さを何うにか防ぎ、斯うして時時叔母さんの御機嫌を自由に伺ふことが出來れば、それが最う叔母さん私には何よりでござんす」と云ふと、「おせいや、それも左様だな」と祖母は答へて、まだ寡婦生活させられるのも可哀さうではあるが、強つて何うしろとは言ひかねたさうである。

その人の内情を斯う哀れに聞いて見れば、色の青い、何處となく沈んで淋しい、おせい小母さんの顔を見るのが、小供心にも、自分は何となく氣

の毒であつた。

(三十四) 口真似

祖母は家に歸つてから母の肥立を心配して、「何うか嫁の身に別條のござ  
いませんやうに」と、毎日毎夜間がな暇がな御祖母さまにお願ひ申して居  
た。

四五日も経つと、自分が好くそれを覚えて、お佛壇の前に行つて祖母に  
代つて鈴を鳴し、「何うか嫁の身に別條のございませんやうに」と言つて拜  
ひと、祖母は泣いたり笑つたり叱つたりして、「眞個に小兒と云ふものはね  
え、祖母さんの氣も知らないで」と情なさうに言つた。

けれども幸ひにして、祖母の母に對する心配が無益に成つて過ぎたのは、  
我が家に取りて何よりの仕合であつた。その後母は枕直も事なく濟んで好  
く肥立ち、最早おせい小母さんの手を煩はさずに、總ての事が自分で自由

に出来るやうになつた。

父が態歸つて来て此の事を祖母に話すと、祖母は心から喜んで安心し、  
「それはまあ何より以て嬉しいことぢやないか。ア、お蔭さまで私は今日  
から重荷を下したやうな氣がします。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、  
ア、まあ辱ないことぢや有がたい。俊介さん、人間は善く神佛にお禮を  
申さないで先行がしませんよ」と言つた。

父は誠に温厚誠實な人。殊に我が親の言葉とあれば、断じて背かない人  
であつた。この時もただ「ハイ、ハイ」と言つて心から身を入れて聞いて居つ  
た。その、母に對する態度の温順さと言つたら、世間で學者と立てられる  
人のやうには見えなかつた。

祖母は吉報を聞かされて、心から安心したものだと思える。父に向つて  
むづかしい事を言つた後では直に笑ひ出した。「變だな」と思つて、自分は  
其の顔を見て居ると、祖母は父に向つて言つてくれねば好い事を遠慮なく

言つて了つた。それは即ち自分が兼ねて屢々祖母の口真似をした、「何うか嫁の身に云云」の一件であつた。

父も笑ふ、祖母も笑ふ、あなじ事を言つて泣いたり笑つたりして祖母が八人藝をするので、自分には意向が悪いよりも寧ろ其の舉動を異様に感ぜざるを得なかつた。「大人と云ふは妙なものだ、アレ位な事が何うしてそんなに可笑のだらう。それぢや今度何時か好い機會を見出したら、皆の居る前で、祖母さんが毎朝毎夜讀んで居る彼のお經の真似を一番巧く遣つて見やう」と窃に思つた。

今森の生家に居る我が母は、まだ産蔭に居る間は是非も無かつたが、枕直も最う何時の昔にか事なく濟んで、今は何をしやうと既う差支の無い身體に成つて見れば、姑ばかりを家に置いて未だ何方も手の懸る孫を二人共にあてがひ、自身ばかり毎日手足を休めて居るのは、身體は樂でも心の中には毎日汗が流れるものだと見える。その後また一寸用事が出来て、父が

家に歸つて来た時、母の心を祖母に傳へて、「それで彼は一度歸つて、四十九日の時に又出かへやうと言ひますが、おッ母さん何うさせたものでしやう」と言ふと、祖母はまるで問題にもしなかつた。「そんな下らない事を氣にして、女子の一番大切な産後の身體に輕擧な事をして、歸つて萬一病ふやうな事でもあつたら、それが私は嬉しいでしやうか。また一方から言つて見ても、人間一生の間に人が親に死に別れると云ふことは、さう幾度もあるべき筈のものでない。何うか切めて四十九日の濟むまでは其方に居て子として朝夕決しておろそかの無いやうに、おッ母さんのお後を大切に吊ふやうに私が言つたとお前から嫁にくれぐれも左様言つておくれ俊介、私に此處で一月や二月小供を相手に留守居をしたからどて何で骨なぞが折れるものか、私の事を心から思つておくれなら、十分其方で養生しぬいてから歸つて来てくれたが嬉しい。さうで無くして無理に歸り、若や産後の身體を永く悪くするやうな事でもあつては、この先私が萬一病氣でもした場

合には、私の看病は玉代でなくて夜の目も寝ずに誰がしてくれる。なア物の道理がまあ左様云ふ譯になりはすまいか、お前は俊介さん何う思ふかい」と言つた。

父は其の意を能く了解して、「イヤ最う實におツ母さんの仰る通りでございます。今度歸りましたら彼に好く左様言つて聞かせまじやう」父は斯う答へた後で、「二人ぢや夜分もお骨が折れまじやうから、歸つた序に切めてはこれ丈でも連れて参りまじやうか」と言つて、父は自分の顔を見た。

「ナニ小供は少しも荷にはならん、これは家の寶物ぢや、遣つては私が心淋しい。まあこれから孫も三人になつた。私は毎夜孫達三人の事ばかり考へて楽しんで居る」と言つた。

また自分としても親を慕はぬ譯ではないが、知らぬ所へ行つて小さく無つて居るよりは、住み馴れた土地に居て、下の龍門川の鮎や鯉を見たやうに自由自在に遊びたかつた。殊に此節は父も母も居ないからと言つて、お

隣家の姉さんが毎夜宿りに来てくれるんだもの。

### (三十五) 嬉しき朝

その後程なく今年も早端午の節句に成つた。

例年の通り一望蒼然たる我が青葉の村に鯉や鰻や吹流などが賑かに立つて、美しい五月の空にハタ／＼と終日音がして居つた。家にも祖母が人を雇つて、前の廣い庭に鯉や鰻や吹流などを賑かに立ててくれた。自分と次郎は毎日楽しんでこれを仰いで、飛んだり跳ねたりして喜んだ。その心には憂ひも無ければ不足もなく、ただ元氣と歡喜に幼い心は満されて居つた。節句の日には祖母が茅卷を作つてくれ、外にも色色御馳走をして、「サア今日はお前達のお節句ですよ、何方も丈夫で結構だね、俊ちゃんも次郎ちゃんも澤山お食べなさい、今年はお父さんも母さんも居なさらんで淋しいね」と言つた。

この節は最う田植が始まつて、村は實に多忙しい事だつた。今年の四月から五月にかけては、祖母は實に多忙であつた。これを森に居て想像する母の心も樂では無かつたに相違ないが、祖母の實狀は更にそれ以上であつたかも知れぬ。

腹からの百姓であれば、これ位の事は平氣であらうが、我が祖母にしる母にしる歴とした武門の出、家に来てからも鍛錬などは持たずに来た人。而も祖母は五十の坂を過ぎてからの俄百姓、男子でも骨が折れたに相違ないが、彼此愚痴を言つて居る暇で、わが祖母は笑つて早早と手足を動かす人であつた。

御隠居さま貴方にはお骨が折れまじやう、その中に私供が刈つてあげます」と言ふ村の人達の厚意に對し、「何うも有がたうございます」と厚く禮を言ふ、その一方に於いては早、自分達を野に連れて出て遊ばせざる片手間に、祖母は自ら鋤を把つて都合三反歩の麥を刈つて了ひ、それを自分で始

末して居る間に、人に頼んで田を鋤かせ、稻の根附も眞先に人を頼んで急いだので、最う節句頃には麥は残らず俵にして倉に藏め、餘所では根附の多忙さに殆んど夜の目も寝られぬやうに今混雜して居る最中に、祖母は早一先農事を了つて、「物は何でも心がけと手順次第のものぢやなし」と、毎日獨語を言つて家の周囲の掃除でもして居つた。

その中に五月の節句が済むと、森の祖母の四十九日が間近く迫つた。「これには何うあつても出かけなければならぬ」と言つて土産物の準備などして過して居つたが、最う明後日が七七日のお逮夜だと云ふ日になると、祖母は兼て約束して置いた村の林平と云ふ二十八九の力の強い男を一日雇ひ、自分連兄弟を連れて森に出かける事になつた。

林平は既に悉皆身仕度をして、この日の朝早く前の石階を登つて来て、「御隠居さまお早うござります。ぢやア今日はお供を致しませう」と言つて家に入つて来た。何事をするにも早い我が祖母は、この時には最う覺て



の準備を終つて居つたが、「ハイお早うございます。林平どん、多忙しい時に何うも氣の毒だね、それぢやア早速出かける事にしましやう」と言つた。今度も亦留守は多年家に出入して居るおのぶと云ふ正直な親切な、而も能く物に氣の行き届く老婆さんに頼んで出かける事に成つて居つたが、老婆さんは早前の夜から来て家に宿り込んで居つた。土間には家の定紋を附けた、一荷の新しい四角な形に出来た、我が地方では「擔籠」と稱する、青い竹籠が置かれてあつた。その一方にはお重詰の餅や、外に色々お供物や見舞物や又土産物などが入れてあり、一方の籠には綺麗な蒲團を敷いて、自分達兄弟を乗せるやうに準備してあつた。兄弟が今籠に乘せられて、「今日はこれから祖母さんと一緒に森に行くんだ」と喜んで居る所に、お隣家の小母さんと姉さんが見送に見えた。小母さんは祖母に向つて、「お早うございます」と言ひ、「オヤ最う悉皆お仕度が出来ましたな、ぢやア皆さん行つて入らっしゃいよ。彼方へ行らしたら、

何うかお父さんにもお母さんにも、小舅さんにもおせい小母さんにも宜しく仰つて下さいましよ」と言つた。姉さんは自分や弟の籠に乗つて居る傍に来て土間に屈み、「ママ好いわねえ俊ちゃんも次郎ちゃんも、このお籠に乗つて行らっしゃるの、何時歸つて入らっしゃるの、この前見たやうに長く居ちやア厭アよ、早く歸つてらっしゃいな、私今日から又淋しくなるわね」と言つた。「姉さん今度は直に歸つて来るの、待つてらっしゃい、ねッ」と自分は元氣よく慰めた。假令幾日でも斯うして姉さんに別れるのは辛い、今度は大分久しく別れて居たので、自分は何となく母の顔が戀しかつた。「御隠居さん、最う宜しうございますか」男は丈夫な太秤棒を土間に突いて尋ねて見た。お隣家の小母さんやおのぶ老婆と何か話して居つた祖母は、上櫃の上に置いてあつた涼傘を取つて、「ハイ宜しうございます。それぢや徐徐出かけましやうかね」

男は直に籠の緒に棒を通して、腰を屈めて擔いで立つた。籠は宙に地から空くこと一尺許、「ヤア面白いなア」自分は思はず兩手を拍いて嬉しがつた。籠は早表に出る。「コレ」俊ちやんおとなしくして居るんですよ」祖母は斯う言つて人人に向ひ、「ぢやアまあ行つて参ります、何うか何分留守をお願ひ申します」と暇を告げて戸外に出た。「ぢやア何うか御機嫌よう」と送られて、前の石階を下りて行くと、長屋門の内左右兩側に高く見上げる樺の青青した美しい無数の葉が、五月の空の朝風に涼しい音をサハくと立てて居た。

あのふ老婆は下の道まで送つて来て、此處で最後の別れを告げて見送つて居た。小母さん母子は其の家の前まで送つて来て別れを告げ、母子共其處に立つて見送つて居た。自分は此方から「小母さん、姉さん」と呼んで見ると、向ふでも「俊ちやん早く歸つて入らッしやいよ」と言ふのが聞えた。祖母は白い腰巻を見せて涼傘を片手に未だ開かず、足袋に此の前の白

い鼻緒をすげた麻裏草履を穿いて後から續き、「今日は赤子が見られるな、早く行かうと待つてるだらう」と嬉しさうに言つた。その中に最う小母さんや姉さんの姿が見えなくなると、籠は青葉の村を出て又青葉の山に入り、青山流水の間を西へくと向つた。

(三十六) 朱いお膳

この日森では「最う今日あたりは見える時分だ」と言つて、皆朝から待受けて居たさうだ。

十一時頃森に着くと、皆大騒ぎして迎へ、家は又久振で賑かになつた。この時誰よりも先に祖母に顔を見せたのは、可憐赤子を抱いた、さうして産後は又一層色が白く成つたやうに見える我が母であつた。「オヤ」母は祖母の顔を見て、生き復つたやうに嫣然笑つた。おもひは同じ祖母も満面嘻嘻として心配したが丈夫に成つて好かつたねえ、まあ一寸早く其の子の

顔を見せておくれ、今日も楽しみ楽しみ三里の山路を越えて来ました」と言ひ、祖母は未だ草履も脱かず玄關の前に立つた儘手を延して妹を母の手から取つて抱き、顔を覗いて腹の底から聲を出し、「マア可憐ぢやないか大きくなつたね、それにこのまゝお顔の綺麗な事は何うぢや、お乳が多いと見えて、ホ、お手も足も此の通り肥つて居る」祖母が喜ばば母も喜ぶ。今籠の中から出された次郎は、久振で母に會つたので喜んで飛び着く。「オオ次郎ちやんか、お前は何うして居ました」と母は抱へて抱き締める。次郎は乳を思ひ出したか、小さい頭を着物越に母の胸の邊に當てて摺りつける。自分も其の間に林平の手に依つて小猿のやうに輕輕と玄關に運ばれて母の傍に立たされた。「母さん」と言つて其の長い袖に取りついて顔を見上げる。「オ、俊ちやんもお出でたつたね」と久振で戀しい笑顔を母は見せて言ふには言つたが、次郎のやうに抱いて貰ふことは出来なかつたので、何となく張合の無いやうな氣持がした。

兎に角玄關では今大騒ぎして居ると、相變らず何處となく顔に淋しみの見えるおせい小母さんは臺所の方から盥を運んで来て、「オヤ入らッしやいまし、好くまあお来し下さいましたね」と挨拶をして居る所に、小母は手桶に美しい水をユラリと汲んで来た。「ア、其方へ参ります、何うぞお構ひ下さいませな」と言つて小母の顔を見て、「幹男さん、貴郎その後お變りもございませんでしたか」と祖母は優しく尋ねて居た。一同に勧められて、祖母は今足を洗つて居ると、其處に清水の小父さんも丁度見えた。「お父さんは」と自分は母に尋ねて見ると、「お役所、今にお歸りになりますよ」と言つた。「母さん、僕は今夜誰と寝るの」と母に聞いて居ると、大きな手が後から自分の頭を鷲掴にして、「俊ちやんは此の小父さんと寝るんだよ」と言つた。悔りして振向くと、それは清水の小父さんだつた。

小父さんは笑つて、「好く来たね、松木よりは森の方が好いだらう、小父

さんの家の子にならうぢや無いか」と言つた。

祖母は此の間に足を洗つて座に上り、清水の小父さん始め一同に改めて

挨拶して、「マア一寸おッ母さんにお目にかかりましやうかね幹男さん、さ

あ俊ちやんも一緒に此方に来て祖母さんにお目にお懸りなさい。南無妙法

蓮華經、南無妙法蓮華經」と言ひながら一間の内に入つて見ると、外祖母

の様のお位牌は未だ其儘に机の上に祀られて、前に整然と御燈明が上り、

線香の烟が淋しく立つて居つた。

自分は一寸外祖母さんのお位牌に叩頭して、直に此方に飛んで来ると、

次郎は未だ母に抱れて居り、赤子は小舅に抱れて眠つて居つた。自分は一

寸赤子の小さい顔を覗いて見ると、母は黙つて嫣然笑ひ、赤子は乳臭い匂を

放つてスヤ／＼と眠つて居つた。

その間に祖母は此方に出て見えた。その眼は直に赤子に向つた。「オ、こ

れはまあ小舅さんに、何うも有がたう、さあ何うかまあ此方に下さい」と

言つて直に取つて抱くと、赤子は小さいお口を開けて欠伸をしたが、次に

は小さい黒いお眼を開けて、頭を少し振るやうにして動かした。

「オ、まあお眼が開いたね、最うお乳の欲しい頃ですか」と言つて母の顔

を見たが、「マア宜いでしやう、少し祖母さんにもお抱しておくれよ」と言

ひ／＼軽く赤子の背中を叩き、清水の小父さんを始め、皆と色色な談話を

始めた。

この時何時の間にか母の後に青い顔が低く見はれて、「玉代さん一寸」と言

つた。母は次郎を其處に置いて、直に起つて臺所の方に行つた。次郎は母

の跡を追うて泣き出した。「次郎ちやんお出で」手を引いて連れてつて遣る

と、おせい小母さんは臺所で禰掛になり、御飯を炊いたりお菜を煮たり多

忙しさに働いて居つたが、此方には早赤い朱塗のお膳が三膳出て居つた。

「ヤア嬉しいなア、僕も今日はお客様に來たんだ」斯う思ふと嬉しくて堪らな

い。母の傍に飛んで行つて、「母さん彼のお膳、僕のは何れッ」母は戸棚の内から凍豆腐か何か出して小母さんに渡しながら、「サア俊ちゃんは何のお膳が好いの、何でも俊ちゃんが好きなのにしましやうね」と言つた。

(三十七) 七 七日

この時の滞在は前来た時よりも嬉しかつた。一ツは父や母の顔の珍らし  
い爲でもあらうが、一ツは全く此の前来た時よりも人の涙を見るのが少  
くなつて、何となく家の内が賑かに成つて来たので、小供心にも自然愉快  
を感じたものだと思はれる。この時若し自分が大人であつたならば、「人は  
死ぬれば一族にも直に斯うして忘れられて了ふ、つまらんものだ」と思つ  
たかも知れぬ。

否、別に忘れると云ふ譯ではない。忘れると云ふ譯ではないが、月日の  
経つに従つて、幾分づつか憂ひに遠ざかつて来るのであらう。さも無い事

には遺族の身體が續かぬことになるのである。

四十九日の法會は實に心残りの無いやうに營まれた。お寺さまも大勢お  
見えになる。引物のお菓子なども實に見事なことであつた。これを見て一  
番喜んだのは、恐らく自分が第一で次は次郎であつたであらう。イヤ、  
自分達ばかりでは無かつた。皆喜んだ満足した。「ア、お立派に御法事が勤  
まりました。おッ母さんも嘸御満足でございませう、幹男さん屹度おッ  
母さんがお浄土から喜んで居らッしやいますよ、ねえ玉代さん左様ぢやな  
いか」と言つて祖母は賞讃した。「マア斯うして皆さんが、色色お心をお添  
へ下さいましたんで、お蔭で立派に勤まりまして、母も嘸喜んで居ること  
でございませう、皆さん何うも色色有がたうございませう」と、母は厚  
く禮を述べた。

未だ外祖母さんの顔が何處か時時その邊に見えるやうな氣がするが、そ  
れは氣の所爲死んでから七日七日が七七日、四十九日の御法事やお慕詣も

早過ぎた。

四十九日の御法事も既に済んだと云ふ事になると、産後の體は最う申分なく回復つたし、母は此儘何時までも森に居切りに居る譯には行かぬ。即ち今度は祖母と一緒に松木に引きあげ無ければならぬ。

それは好いが後は何うする。父と小舅との二人切にならねばならぬ。晝間皆出て行つた後で、留守は誰がする、煮炊の世話は誰がする、おせい小母さんだからと云つて、別に所帯を張つて居なさる上は、いかに遠くは無い所だからと云つても、左様左様此方へばかり来て居なさる譯には行くまい。

母はそれが氣に懸るが、母自身も家を空けて、長く此方にはかり居る譯には行かぬ。「何うしたら好からう」と、これは誰の胸にも窃に問題になつて居るらしかつた。

此處に氣の附かぬやうな我が祖母でない。母が或る夜、「おッ姑さん、何

時立つことにしましやう」と言ふと、「私は最う明日あたり小供を連れて歸らうと思ひますが、皆さう一時に引きあげちやア跡が早速困るぢやないか」と言つた。

「そりや左様ですが何時まで居ても際涯の無いことですか、後は何とか考へて頂きませんぢや」と言つた。「ヨシ、歸れ歸れ、晝間は家を閉めて出て、飯は二人で交代に炊くとしやうぢやないか、なア幹男君」と父が言ふと、小舅は「ハイ」と答へるには答へたが、心の中は何だか淋しさうだつた。

「ナニ家は宜いからまあ當分此方にお居ですよ。さも無くちやア跡が早速困るぢやないか」と祖母は言つたが、「イエ今度は何うしても歸ります、両親共に離れて居ちや小供も可哀さうですから」と言つて、祖母が大好きな赤子の愛らしい顔を見せ、「御一緒に歸りましやうね、私は未だ祖母さん、自分のお家を見ないんですもの、可哀さうぢやありませんか」と、母は赤子に

代つて言つた。

斯うせられては祖母は堪らぬ。俄に今までの主張を曲げて、「それも左様だね、ぢやアまあ兎に角一度一緒に歸るとしますかね」

「ウン歸れ歸れ、此方は二人で何うにでもして遣つて行く、それが却つて氣樂かも知れぬ、ねえ幹男君」と父は言つた。小舅は同じく、「ただ「ハイ」と一言答へたが、我れから進んで、「姉さん何うかお歸り下さい」とは言はなかつた。「左様して、今年のお盆には又ゆつくり上ります、ねえ幹男さん左様しましやう」と言つて、母は小舅の顔を見れば、小舅には不斷の元氣がない。何となく悄悄して、「ハイ、姉さん何うか左様成さつて下さい」と言つて凝然と面を伏せた。母も祖母も此の時の小舅の淋しさうな顔色は、身に滲むやうに覺えたさうである。

(三十八) 秋 草

五人も一緒に打揃つて或る日の朝早く松木に引きあげた後の淋しさは、世界が一齊に滅亡して了つたやうな氣持が小舅にはしたさうである。

この日小舅は例のおせい小母さんと一緒に平時の町外まで送つて来て最後の別れを告げ、此方の姿の見える間見送つて長く立ち、最う全く見えなく成つたので引き返し、途中でおせい小母さんにも別れて家に歸つて見ると、父は早出勤して家には誰も居なかつた。小舅は戸を開けて入つて見たが、「幹男幹男」と呼んで居た祖母は勿論、我が母さへも既に居らず、晝間ながらも森として、物の音一ツ聞えなかつた。小舅は淋しさ悲しさが身に滲みて、これから何をしやうと云ふ希望も無ければ勇氣もなく、祖母の位牌の前に蒲團を被つて寝て了つたさうである。父は薄給、家にも餘財と云つてはない。勿論女中などを使ふ譯にも行かぬので、小舅と自炊生活をして一人は役所に、一人は毎日塾に通うて漢學と數學を勉強して居つた。それは好いが酷いのは大舅で、祖母が死ぬる

とこれまでの五圓宛の仕送を減して貳圓でも壹圓でも送つて來ればまだしもだつたが、その後はまるで送つて來なく無つたさうである。

その中に盆が來たが、盆になつても大舅は祖母の墓詣にも戻つて來なかつた。大舅は手紙一本寄來しもしなかつたが、母が自分達三人を連れて遣つて來たので、家は久振で賑かに成つた。一同松木から來た時は、父は出勤して居なかつた。併し「今日あたり多分見えるだらう」と言つて、この日家に居た小舅は直に飛んで出て、「ア、姉さん」と懐かしさうに呼んだ聲には言ふに言はれぬ歡喜と哀情とが籠つて居つた。

「このお盆には最少し早く出て來やうと思つたが、歸つて見れば又左様も行かないでね、だがまあ別に病ひもせず好かつたね、この前別れた時の淋しさうな面影が何時までも眼に残つて居て、私も彼方で何んなに悲しい思ひをしたことでしやう」と言ひ言ひ母は自分達を連れて奥に入り、「マアおツ母さんにお目に懸りましやうかね」と言つて、祖母の位牌の前に坐

秋  
風  
の  
聲

つて白い兩手を合せたが、斯うして生家に歸つて來ても、以前とはまるで様子が違ふので、張合が無いのか悲しいのか、母は凝然と顔を被うて、暫く其處から立ち得なかつた。

「ア、祖母さんが生きて居て下さつたら、斯うして皆で此處に來たら、まあ何んなにか喜んで下さるだらうにな」と思ふと、その喜ぶ顔が見え、聲までが何處か其の邊で聞えるやうで、自分でさへ何となく張合の無いやうな氣がして、果は悲しく成つて來た。

母と小舅とは泣泣何か話して居る間に、自分は次郎を連れて座敷の椽先に出で見ると、庭には蟬の聲が聞えて、秋草の花も所所に見えては居るが、祖母の生きて居た頃とは違つて、草茫茫と生へて荒れ、軒には蜘蛛が網を張り、まるで空屋のやうに見えた。

久振で我が生れた家に歸つて來たので、母は妹を抱いてお乳を哺せながら昔の事を想ひ出し想ひ出し、小舅と一緒に彼此と家の様子を見て廻つて



居つたが、果は様先に來て涼しい眼に庭を見渡し、「マア大層此處も荒れたことねえ、お母さんが生きて居らした頃は、草一本見えなかつたが、まるで空屋の庭のやうに成つたわねえ」と言つて、母は又涙含んだ。

「何でも涼かげの中に」と祖母に急かれて、今朝未だ朝霧の深い間に出て來たので、森に着いたのは十時頃だつた。今日も林平が此の前のやうにして自分と次郎を荷籠で運び、母は妹を負つて山から山の草深い露を分けく遣つて來たが、路傍の秋草の花は今が真盛で、それにぼうつと朝霧の懸つた眺めは實に何とも言へなかつたが、霧の晴れた跡に桔梗、刈萱、女郎花などが朝露を含んで立つた生々した涼しい姿も、未だに眼の前に見えるやうな氣持がした。

小舅は何處へか出て行つた。母は座敷の涼しい所で、妹にお乳を哺せて眠らせながら身體を休め、俊ちゃん、お山の花は綺麗でしたね、母さんは未だに忘れられないわ、歸りにも亦彼を見ながら行きましやうね」と言つ

た。

自分は玄關に飛んで行つて、道で折つて貰つて來た一束の桔梗の花を持つて來て、「母さん、これ祖母さんに」と言つた。「オ、まだ生々して居ますね、後で母さんがあげますから、臺所に持つてつて水瓶の中に入れて置いて下さいな」と言つた。

自分は今その花を持つて臺所に飛んで行き、瓶の中に入れやうとして居ると、障子が開いておせい小母さんの青い顔が急に見えたとて悔りした。

「オヤまあ俊ちゃんですか、好く入らッしやいましたのねえ」と言つた。

「小母さん花、これ祖母さんに供げるの」小母さんは振返つて、「オ、まあ綺麗なお花ですこと、俊ちゃん折つて入らしたんですか、そりや祖母さんが嘸まあお喜びなさるでしやうよ」と言つた。

自分は座敷に飛んで來て見ると、「ぢやアおせい姉さんが來ましたから、直に御飯を炊いて林平とんに出して貰ふことにしましやう」と、小舅が母

に言つて居つた。

(三十九) 松の影

男は日蔭で少し午睡をした後、御飯んをウンと食べて、祖母に頼まれたお盆の買物をして歸つて行つた。

自分達も御飯を食べた。小舅やおせい小母さんも一緒に食べた。小舅は急に生々して、「今日は御飯が甘しい」と言つて喜んだ。さうして「御飯を炊くのは女に限る。男が炊くと兄さんが炊いても僕が炊いても、一度も碌な飯は出来ん」と歎した。母は笑つて、「そりや左様でしやうね」と言つた。

おせい小母さんは幽霊見たやうな顔をして居る癖に、「ちやア幹男さんも早く玉代姉さん見たやうな別品さんをお嫁さんにお貰ひなさいな、そしたらまあ叔母さんがお浄土から何んなにお喜びなさるでしやうね」と言つた。

小舅は憤然として至極眞面目に、「僕の世話を焼くよりか、おせい姉さん自

身が獨身で居ないで、何處かお嫁さんに行つたらおッ母さんが嘸喜ぶでしやう、おせいも今から獨身ぢや可哀そうぢやと言つて、彼んなに何時も心配して居らしたぢやありませんか」と言ふと、何がそんなに可笑のか、母も高い聲で笑ひ、おせい小母さん自身も大いに笑つた。

笑つた後では又沈み、「眞個にねえ、此方の叔母さんばかり彼様して何時も御心配成すつて下さいましたが、最う今日ぢや私などの事は、誰も心配してくれる人はありません」と言つて小母さんはホロリとした。「何處へかお嫁に行つて了つたら好いでしやう」と、小舅は又ぶツきら棒に言つた。

小母さんは泣いた後で又笑ひ、「だつて私見たやうな者は何處にも貰つてくれる人が無いぢやありませんか、幹男さん貴郎でも貰つて下されば格別だが」と言ふと、小舅は「フン」と鼻を鳴して、「誰がそんな老婆を貰つて遣るもんか」と言つて立つと、二人は又一齊に哄然と笑つた。

御飯の後を片付けておせい小母さんは襷を外し、「少し急ぎの仕事をしか

けて居りますから夕方又上ります。さうして明日から此方へお盆のお手傳に上ります」と言つた。「何うもお多忙しい所を有がたうございませした、何時も上ればお使ひ立て申すばかりで」と母は禮を言ひ、「最う今夜態、お來し下さいませんでも、私が臺所は致しますから」と附け加へた。「でもお小いのがおありに成つちやね」と言ひ、小母さんは自分の顔を見て、「俊ちゃん母さんと少し午睡でもなさいな、今に學校から歸つて來ると、直に勇吉を遊びに寄來しますからね、町にでも少し出かけてごらんなさい、お盆前で賑かでございますよ」と言つて歸つた。

おせい小母さんの歸つた後、小舅と母とは大舅の事に就いて、何か話して居るらしかつた。自分は其の傍に寝轉んで、次郎を相手にして遊んで居ると、何時となく漸漸に目が細くなつて、庭の大きな松の木でシャア／＼と煮られるやうに鳴いて居る蟬の聲が次第次第に遠く聞えるやうであつたが、それ切何にも知らぬやうに成つて了つた。

自然と眼の覺めた時は、最う彼此四時過ぎであつた。次郎はまだおとなしく眠つて居つた。自分は直に母を求めて頭を上げると、何處か庭の方に母の聲が聞えた。

小さい體が驚破と牛起に跳ね起きて縁先に出て見ると、母は色の白い、まだ若さの光つて居る顔を、何處へ在つたか古い編笠の内に隠して、小舅と何か話しながら二人で草を取つて、清潔に庭の掃除をして居つた。さうして木かげの涼しい所に隣のおえいちやんと云ふ少女が、家の赤子を負つて立つて居つた。

自分は庭に飛び下りて、黙つて母の傍に行つた。「オヤお眼が覺めたの、次郎ちやんは」と振り返り、「ア、まだおねねして居るね」と言つた。

「母さんお掃除をするの」と聞いた。「ハイこんなに草だらけにして置くとね、今に祖母さんがお歸りなさつてお歎きなさるからね」と言つた。「母さん祖母さんが又歸るの」喜んで母に問うて見ると、「ヘアこのお盆にはね、

お精靈さまに成つて今にお歸りなさいませよ」と教へた。「ヤア嬉しいな」と自分は思つた。「それぢや」と思つて、自分も母や小舅に手傳ふ積りで草を取らうとして見たが、此方には鎌がないので、草は根から抜けずに切れた。庭の草を清潔に抜いて了つて、箒目鮮に母が掃き、掃き寄せた土や草は小舅が何處へか運んで了ふと、跡は誠に生々しく、掃き寄せた土や草は次には清潔に家の周囲の草を取つて掃除した。それが済むと小舅は母に言ひつかつて上に上り、今回は家中隅から隅まで清潔に掃き出し、小舅が力任せに畳まで残らず拭き上げて了つた頃は、最う近所の家で行水を始める時分であつた。

母は其の間に水を汲み、行水のお湯を沸す一方にお夜食の準備をして居つた。この時隣のおえいちやんは歸つて、赤子はおせい小母さん所の勇ちやんの背中に縛りつけられて眠つて居つた。「赤子は好く眠るものぢやな」と自分は思つた。

自分と次郎と勇ちやんは、夕方勇ちやんが捕まへた蟬を糸で縛り、椽先でそれを玩弄品にして遊んで居ると、其處に猿股一ツになつて居る小舅が出て来て、「オイ汝等は其處を餘り取散すなよ、母さんに叱られるぞ」と云つた。

この時丁度庭前に母の姿が見はれた。母は浴衣を着て襷を掛けて居つたが、今まで火の傍に居た所爲か、顔は櫻色になつて、水照して居る涼しい外背の邊から頬にトロリと汗の玉が流れて居た。

叱るかと思ふと叱りはせず、「幹男さん一寸行水しておくれ、後は小供に遣はせます、お湯が冷めますからね」と言つた。「兄さんは今日は何うして斯んなに遅いでしやう」と小舅は言つた。

「そうして居る中には今に歸つて入らッしやるでしやう、早い方が好いわ」と言つた。「ぢやア左様しましやう、兄さんも僕も今年の水を浴びる丈で、盥で行水などは未だ一度もした事がありません」と言つて、直に臺所の方